



Title	シネウス碑文訳注
Author(s)	森安, 孝夫; 鈴木, 宏節; 齊藤, 茂雄 他
Citation	内陸アジア言語の研究. 2009, 24, p. 1-92
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/20767">https://hdl.handle.net/11094/20767</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# シネウス碑文訳注

森安孝夫・鈴木宏節  
齊藤茂雄・田村 健  
白 玉 冬

Plates .....	Plate I—XII	4. テキストと翻訳	
1. はじめに .....	1	(1) 翻字と転写 .....	9
2. 遺蹟と碑文の状況 .....	3	Transliteration and transcription	
3. 凡例 .....	7	(2) 英訳 English translation .....	23
(1) 突厥文字ローマ字対照表		(3) 和訳 Japanese translation .....	33
(2) 翻字 (Transliteration) の原則		5. 訳注 .....	42
(3) 転写 (Transcription) の原則		史料典拠一覧・略号・文献目録 .....	79
(4) 翻訳 (Translation) の原則		Figures .....	Figure A—F

## 1. はじめに

シネウス碑文とは、モンゴル国に現存する、東ウイグル可汗国第2代可汗<sup>カガン</sup>である葛勒可汗こと磨延啜（在位 747～759 年）の紀功碑である。本稿は、1999 年刊行の森安孝夫／オチル（共編）『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』（大阪大学文学部・中央ユーラシア学研究会）＝ T. Moriyasu & A. Ochir (eds.), *Provisional Report of Researches on Historical Sites and Inscriptions in Mongolia from 1996 to 1998*, (Osaka University, Faculty of Letters, The Society of Central Eurasian Studies) に掲載された森安孝夫「シネウス遺蹟・碑文」（pp. 177-195／本稿ではこれを旧版と呼ぶ）の増補・改訂版である。旧版のテキストはラムシュテット (Ramstedt 1913) の写真とテキスト，ならびに 1996～1998 年度日本モンゴル合同のピチエース＝プロジェクトにより採取した 3 部の日本式拓本（1996 年・1997 年度に採拓。2 部：大阪大学大学院・文学研究

科所蔵／1部：モンゴル科学アカデミー歴史研究所所蔵)を底本にして、新たに作成した突厥文字(テュルク=ルーン文字)の翻字と古代トルコ語のローマ字転写であった。そこには、現地において実際に碑文を調査し、採拓中の墨入れ前に、森安とモンゴル国のトルコ学者であるバツルガが判読した結果も反映されていた。

ところで、森安は大学卒業以来、ウイグル史の根本史料としてシネウス碑文に注目し研究を続けてきたが、あくまでテキスト底本はラムシュテット版だけであり、限界を感じていた。しかるに1991年のソ連崩壊により、碑文が現存するモンゴル国で現地調査をしようとする国際的環境が生まれたため、森安は日本モンゴル合同の調査団を結成し、当時のモンゴル科学アカデミー歴史研究所のオチル所長の全面的協力のもと、新たな碑文拓本を入手することができたのである。その最初の成果が、冒頭に掲げた1999年刊行の旧版であった。

その後も、大阪大学所蔵拓本を森安ゼミ(古代トルコ語演習)のテキストにして再解説を重ねてきたが、この間、森安のみならず共著者であるゼミ生のアイデアを基に旧版のテキストを改めたり、訳注に増補・修正を施すことができた。そこで、ここに旧版に掲載されていた遺蹟と碑文の状況に関する記事(第2章)を残し、凡例を示しつつ(第3章)、最新のテキストと翻訳(第4章)ならびにそれに伴う訳注(第5章)をまとめて提示することにする。図版については、旧版のものを一部増補し、**Figure A—F**として稿末に再録する。

今回の訳注における共著者の最大の功績は、北面の行数が、ラムシュテット版以来旧版まで一貫して踏襲されてきたテキストのように12行ではなく、13行であったことを発見したことである。従来は、北面に続く東面・西面がそれぞれ12行であるため、北面もそれと同じであろうという前提のもと、北面10～12行の行末付近に僅かに残る文字列を、残存状態のよい行の前半部分と単純な推定で繋げていた。しかし、原拓を虚心に見ればそこに1行の「ずれ」が生じているのであり、実際には北面は13行とみて復元すべきなの

である(旧版の **Plate 11e** を改めた **Figure E** を参照)。

この結果、以下の新事実が明らかになった。従来のテキストでは、北面 11 行目末尾の「タイ=ビルゲ都督<sup>トトク</sup>を」が、北面 12 行目冒頭の「葉護<sup>ヤフグ</sup>に彼が任命した」に直結すると信じられていた。そのため、ウイグル可汗国初期においてどうして九姓<sup>トクズ</sup>オグズ(九姓鉄勒)中のバイルク/バヤルク(拔曳固/拔野固)部のリーダーであるタイ=ビルゲ都督(大毗伽都督)がウイグルからヤブグの称号を与えられるのか、歴史的に誰もうまく説明ができず、解釈に苦しんできた。しかしながら、復元された新テキストによれば、タイ=ビルゲ都督はヤブグになど任命されていないことになり、これまでの大きな疑問の一部が氷解する。そればかりか、後述するように、タリヤト碑文の読み直しと合わせるならば、磨延啜が父である初代可汗からヤブグに任命されていたということも判明するのである。

## 2. 遺蹟と碑文の状況

**遺蹟の所在地**：ボルガン<sup>アイマク</sup> 県，サイハン<sup>ソム</sup>郡のモゴイン=シネウス。実際にはサイハン郡とハイルハン郡の境界付近にある。現地調査隊はハイルハン郡の宿舎より、ジープで 40～50 分かけて現地に到着。北緯 48 度 32 分 28 秒，東経 102 度 12 分 46 秒 (**Figure F**)。Aalto 1966, p. 15; MSSP, p. 59 に概略地図あり。

**調査日時**：1996 年 8 月 30 日～9 月 1 日；1997 年 8 月 24～25 日。

**調査者**：森安孝夫，松田孝一，林俊雄，吉田豊，片山章雄，大澤孝，松川節，松井太，オチル (А. Очир)，ボルド (П. Болд)，バヤル (Д. Баяр)，バツトルガ (П. Баттулга)。

**調査方法**：碑文の上にテントをかぶせて採拓。1996 年に拓本を 2 セット，1997 年にも 1 セット作成。各年度とも大阪大学に拓本 1 セットずつを将来。あとの 1 セットはウランバートルの歴史研究所に保管。全面の写真は林が撮影，ビデオは森安が撮影。部分的には各自が撮影。採拓にも撮影にも，重い碑身を大勢で転がした。1997 年度は森安とバツトルガが採拓中の墨入れ前の状態で，

テキストのチェック作業。遺蹟全体については巻尺による簡単な計測と撮影のみ。碑身と亀趺については丁寧に計測。

**遺蹟の状況：**各辺が約50mの正方形の低い土塁の中に円形の積石塚がある。土塁の内側に浅い周溝がある。南側に門があったらしく、土塁も周溝も切れている。土塁と塚は元はもっと高かったはずである。塚は地表から1~1.5mの高さまでゴロ石が積み上げられている。その中央には大きな盗掘穴があり、その窪みの深さは1.9m。積石塚はシヴェート=オラーン遺蹟のそれより小さいが、一つ一つの石は逆にこちらの方が大きく、一抱えほどの大きさの石が目立つ。塚は四角い土塁の中央にあったのではなく、南側の門の方に偏っている(**Figure A**)。積石塚と土塁との間の東北寄りの空間に、石碑と亀趺が横たわっている。

**遺蹟の景観：**この遺蹟は、東西1.5~2km、南北4~5kmと思われる小さい盆地状草原の、中央部の南寄りのところにある。この盆地状草原全体は緩やかな斜面をなしており、シネウス湖の方(低い方)以外の三方はきわめて低い丘に囲まれている。これらの丘は草のみで覆われ、樹木はない。もう一方の、湖の向こうの遠くてやや高い山には森林あり。そこには1996年8月31日に初雪が降った。あちこちにゲルが2~3家族ずつ点在している。ハイルハンとシネウスとの間には似たような規模の小盆地状草原がいくつもあるが、シネウスのものはとりわけ形がよい。周囲の丘には古い遺蹟らしいものは何もない。

**碑文の状況：**石碑はやや赤っぽい花崗岩のようである。碑身は従来の報告通り2つに折れている。上部の三分の一を小断片、下部の三分の二を大断片と呼ぶことにする。かつて碑文を支えていた基台は、頭部は欠けているが、亀甲の紋様と4本の足は残っているれっきとした亀趺である(**Figure B**)。ただし亀趺の出来栄は、同じ東ウイグル可汗国時代(744~840年)のタリアト碑文の亀趺と同程度で、後世のモンゴル時代のそれと比べてはるかに見劣りするばかりか、先行する突厥第二可汗国時代(682頃~744年)のキョル=テギン碑文のものにも劣る。あえていえば、突厥第一可汗国時代(552~630年)のブグ

ト碑文の亀裂程度にプリミティブである (Figure C). 碑身のサイズについてはスケッチに細かく記入した (Figure D). 文字の彫りは浅くはないが、それほど深いわけでもない。ラムシュテットが調査した時点と比較して、碑文の風化がわずかながら進んだようである。

遺蹟・碑文の写真：Ramstedt 1913; *Album*, pp. 235-244; 蒙古国, pp. 202-205.

遺蹟の図面：MSSP, p. 59; Войтов 1996, p. 38; MSSP, p. 59 にある図面を借用し、それに我々の計測結果を記入した (Figure A).

碑文のスケッチ・復元図：片山がラムシュテットの写真を基に、スケッチを作成。そこに計測値を記入した (Figure D). かつてサンクト=ペテルブルグに、コトヴィチ作成のスケッチ (テキストの模写か?) があったという (cf. Tryjarski 1981, pp. 348-349).

拓本所蔵機関：① フィンランド、ヘルシンキ国立文書館：フィノ=ウゴール協会旧蔵 SUS 2.20 (cf. Aalto 1971, p. 106; Halén 1978, p. 99). ラムシュテットとバルシが採取した西洋式の押し型拓本 6 枚が現存するが、小断片の北面と大断片の東面の拓本 2 点は紛失している。② ロシア科学アカデミー東洋学研究所 サンクト=ペテルブルグ支所：ラムシュテット採取分 (cf. Kljaštornyj 1988, p. 75). ③ モンゴル科学アカデミー言語文学研究所 (cf. Болд 1990, p. 64). ④ モンゴル科学アカデミー歴史研究所。⑤ 大阪大学大学院・文学研究科：1996 年・1997 年度に採拓した 2 部を所蔵。

本稿は、ピチエース=プロジェクト参加メンバーが 1996 年 8 月 31 日に採拓したシネウス碑文の拓本写真 8 枚 *Sine-Usu* N1, N2, E1, E2, S1, S2, W1, W2 を、巻頭に **Plate I—XII** として分載した。なお、これらの拓本写真は大阪大学総合学術博物館の「総合学術博物館統合資料データベース」上でも閲覧することができる [<http://www.museum.osaka-u.ac.jp>]. 同データベース「モンゴル国現存遺蹟・碑文調査拓本」の「シネウス碑文」を参照。

考察：シネウス遺蹟は、1909 年、フィンランドのフィノ=ウゴール協会が派遣した調査隊によって発見された。そして、本シネウス碑文は調査隊の隊長で

あるラムシュテットによって初めて学界に紹介された。Ramstedt 1913 は碑文本体の写真とともにテキストとドイツ語訳が発表されたものであるが、その段階で既に相当の研究水準に達していた(cf. Рамстедт 1914)。その後、オルクン、王静如、マロフ、アイダロフらも現代トルコ語・中国語・ロシア語の全訳を発表したが(ETY I, pp. 161-186; 王静如 1938; PDPMK, pp. 30-44; Айдаров 1971, pp. 339-352)、テキスト部分についてはオリジナルな研究とはいえない。その理由の一端は、ラムシュテットが拓本の写真を掲載しなかったことであろう。クローソンもその古代トルコ語辞書(ED)の中でこの碑文からの引用を頻繁に行っているが、やはり拓本がなかったために苦労したようである。その意味で、ビチェース=プロジェクトにより採取された拓本と、それに依拠するテキストと和訳・英訳は、これからの学界に大いに裨益するはずである。

ただし、20世紀初めも今も、碑文がよく残っているのは小断片の北面と大断片の東面、比較的よく残っているのは小断片の東面・南面と大断片の南面であり、全体としては約半分が読み取れるに過ぎない。そのためしばしば文脈を追うことさえ困難である。それにもかかわらず、その情報量は決して少なくはない。とくに同じ東ウイグル可汗国第2代可汗、葛勒可汗(磨延啜)の紀功碑であり、1970年代に初めて発表されたタリアト碑文ならびにテス碑文と相互に補完し合うことによって、ラムシュテットの時点よりも「読み」を進めることができる。

ところで、シネウス・タリアト・テスの3遺蹟は、いずれも磨延啜のために造営されたものである。しかし、1人に3つの墓が造られるはずはなく、またタリアト遺蹟とテス遺蹟には埋葬儀礼と関係するような遺構が存在しなかったことから、現在ではシネウス遺蹟こそが磨延啜の墓所であったと考えられている(cf. 林 1994, p. 8; 林 2005, pp. 103-104)。それゆえ、シネウス碑文は彼の死後、すなわち759年ないしその直後に建立されたものと見るのが妥当である。

### 3. 凡例

#### (1) 突厥文字ローマ字対照表

##### 母音 *Vowel*

前舌 **front**

両舌 **double**

後舌 **BACK**

a (for a / ä) ↓

i (for i / i / ä / e) ↑

ü (for ü / ö) Ɱ

W (for u / o) >

##### 子音 *Consonant*

前舌 **front**

両舌 **double**

後舌 **BACK**

b (for b / v) Ɱ

B (for b / v) ↓

č ʎ

ič ʎ

d X

D ʒ

g €

G ʎ

k ʎ

Q ʎ

ük ʎ

uQ ↓

l ʎ

iQ ↓

L ↓

lt M

m ʒ

n ʎ

N >

nč ʒ

ŋ ʎ

nt ⊙

ñ ʒ

p 1

r ʎ

R ʎ

s (for s / š) |

S (for s / š) ʎ

š (for s / š) †

t h

T ʒ

y ʎ

Y D

z ʎ

## (2) 翻字 (Transliteration) の原則

# 碑石が折れているその破断部を示す。 Severed point of the inscription.

: 句読点。 Punctuation.

[aBĊ] 完全に破損している文字を推定で補ったもの。 Letters wholly restored.

(aBĊ) 残画が見えるのを補ったもの。 Letters partly damaged but restored with certainty.

/// 完全に破損している文字。 Damaged and illegible letters.

... 残画が見える文字。 Illegible letters with some traces. Number known, indicated by points.

## (3) 転写 (Transcription) の原則

# 碑石が折れているその破断部を示すが、1つの単語が2断片に跨がる場合はその単語の後にこれを入れる。 Severed point of the inscription (placed after a word when it extends over two fragments).

[aBĊ] 単語全体が破損しているものを推定によって復元したもの。 Words wholly restored.

<aBĊ> 本文に破損はないが、碑刻者が彫り忘れたために脱落したと思われる部分の推補。 Letters omitted by mistake, but restored by the editors.

/// 復元不能の破損箇所。 Damaged and illegible parts.

aBĊ 下線部は、それに対する訳注のあることを示す。 Underlining in the transcription indicates that the part in question is discussed in the commentary.

## (4) 翻訳 (Translation) の原則

[aBĊ] 単語全体が破損しているものを推定して復元したもの。 Words wholly restored.

(aBĊ) 訳文の補足説明。 Words not in the text but added to improve the English, or explanatory remarks by the translators.







**N13** (冒頭に 16 文字分のスペースあり)

////.../////.:T...BWDN//#####Ti/////

////////////////////////////////////

////////////////////////////////////Dm

////.../////.:T...bodun//#####-ü/////

////////////////////////////////////

////////////////////////////////////-đim

**E1** TWTDM/////mü(č)nčYb i(r)[Yη](iQa)bü(kgük)[dajy t(d)m:k i č(a  
Y)R(W)[Q] #BTRrkli:süηsdm:nt a:(š)nč(Dmk)ünR[TTLMs]t ü(n)ü[č]r  
lm s[b]ü[kg]ük d a:s k z W G z:T W Q z T T R:Q L m D u Q:k i Y η i Q(a):k ü(n  
T)WGRW:süηsdm:QWLm:küηm:BWDN G:t η r i:

tutđim // // // üčünč ay bir yañıq**a** bükägükdä yetdim kečä yaruq # batar  
ärikli süñüşdim anta sančđim kün [artatılmış?] tün öčürilmiş bükägükdä säkiz  
oğuz toquz tatar qalmaduq eki yañıq**a** kün tuγuru süñüşdim qulum künüm  
bodunuy täñri

**E2** yr:YW:b i r(t i:nt a):š(nč D)m:Y z uQLGLG(G)W //(D)/(t η)r i:TWT a:b  
i r t # i:Q R a:i g l:BWDNG:Y(uQ)Q i(L m)D m b i n(B)R[Q]i N:(Y)i L(Q)[i](š  
i N)[Y]W(L)m(D)m:(Q)i(Y)N:Y(D m)TWRGW R W(Q)W T m:k n t ü(B)W  
D(N)m:t i d(m):(W)D W:(k)l(η)t i d m:Q W D p:B R D m:k l m d i:y i č a:

yer ayu berti anta sančđim yazuqluγ atlıγıγ // // täñri tuta berti # qara  
egil bodunuy yoq qılmadım ävin barqın yılqısın yulmadım qıyın ayđim  
tuγuru qottım kántü bodunum tedim udu kälıñ tedim qodup bardım  
kälmädi yičä

**E3** i r t m:BWRGWDA:y t d m:t ü r t nč Y:T W Q z(Y η i Q)a:s ü η s d m š nč D  
m:Y # i L Q i š i N:BR mi N:Q i z i N:Q W D z i N:k l r t(m):b i s nč Y:W D(W)k

l t i s k z W G z : T u Q z T T R : Q L m T i : k l t i s l η a : k i d ( n ) : Y i ( L W ) N : Q W L : b  
r d n : š i η R : š i p B š i η a : t g i : č r g i t d m

ertim burçuda yetdim törtünč ay toquz yañıqa süñüşdım sančdım  
yılqısın # barımın qızın qoduzın kälürtim bešinč ay udu kälti säkiz oçuz  
toquz tatar qalmatı kälti sälänjä kedin yılun qol berdın sıñar šıp başıña tägi  
čäriğ etdim

**E4** k r g ü n : š Q š i N : š i p B š i N : k ü r a : k l t i : ( Y ) G W č i s l η k a : t g i : č r [ g ] # l d i : b  
i s n č Y : T W Q z W T z Q a s ü η s d m : n t a : š n č D m : s l η k a : š i Q a : š n č ( D ) m : Y  
z i Q i l t m : ü k s i s l η a : Q W D i : B R D i : b n s l η a : k ( č a ) : W D W : Y W R i D m : s  
ü η s d a : T W T p : W N r i T m :

kärgün saqışın šıp başın körä kälti ayyuçı sälänjäkä tägi čäriğlädi #  
besinč ay toquz otuzqa süñüşdım anta sančdım sälänjäkä sıqa sančdım yazı  
qıltım üküši sälänjä qodı bardı bän sälänjä kächä udu yorıdım süñüşdä tutup  
on är İdtım

**E5** T Y b i l g a : T W T u Q : Y B L Q i N : ü č n : b i r k i T L G : Y B L Q i N : ü č n : Q R a : B  
W # D N m : ü l t η : y t d η : Y N a i : č k : ü l m č i : y t m č i : s n t i d m : y i č a i s g : k ü č  
g b i r g l : t i d m : k i Y k ü t m k l m d i s k z n č Y : b i r Y η i Q a s : ü Y W R i Y i N : t  
i d m : T W G : T š i Q R : r k l i

tay bilgä totoq yavlaqın üçün bir eki atlıy yavlaqın üçün qara bodunum #  
öltün yetdiñ yana ičik ölmäči yetmäči sän tedim yičä işig küčüg bergil  
tedim eki ay küttim kälmädi säkizinč ay bir yañıq

**E6** y l m a : r i : k l t i : Y G i : ( k ) [ l ] ( i ) r : t i d i : Y G i N : B š i : Y W R i Y W : k l t i s k z n č [ Y ]  
# : k i Y η i Q a : č i G l t R : k ü l t a : Q š W Y : k z ü s : ü η s d m : n t a : š n č D m : n t a : W D  
W : Y W R i D m : W L Y : b i s y g r m i k a : k y r a : B š i : ü č b i r k ü d a : T T R : b i r l  
a : Q T i : T W Q i D m : š i η R i : B W D N

yälmä äri kälti yayı kälir tedi yayın başı yoriyu kälti säkizinč [ay] # eki  
yayñqa čiyiltir költä qasuy küzü sünüşdim anta sančdim anta udu yoridim ol ay  
beş yegirmikä käyrä başı üç birküdä tatar birlä qatı toqıdım sığarı bodun

**E7** ič k d i : š i ŋ R i : B ( W D N ) / / / / a : k i r t i : n t a : Y N a : t ü s d m : ü t ü k n i r i n : # ( Q ) i  
š L D m : Y G D a : B W š N a : B W š N L D m : k i : W G L m a : Y B G W : š D : T b i r t  
m : T R D š : t ü l s : B W D N Q a : b i r t m : nč p : B R š : Y i L Q a : č i k T p a : Y W R i D  
m : ( k ) i n t Y : t ü r t y g r m i k a : k m d a :

ičikdi sığarı bodun / / / / / [-q]a(?) kirti anta yana tüşdim ötükan irin #  
qışladım yayıda boşuna boşunıldım eki oyluma yabyu şad at bertim tarduş töliš  
bodunqa bertim ančip bars yılqa čik tapa yoridim ekinti ay tört yegirmikä  
kämädä

**E8** T W Q i D m : W L Y / / / / / ( ü t ) [ ü k n ] : ( k d ) n : W č ( i n t a ) : t i z : B š i [ n t ] ( a ) Q ( š ) R Q  
W R D [ N ] # ü r g n n t a i t t d m : č i T n t a : T u Q i T D m : Y Y n t a : Y Y L D m : Y Q  
a : n t a : Y Q L D m : b l g ü m n : b i t g m n n t a : Y R T T D m : nč p : W L Y ( i ) L : k ü z n i  
l g r ü : Y W R i D m : T T R G : Y T D m : T B š G N : Y i L :

toqıdım ol ay / / / / / ötükän kedin uçınta tez başınta qasar qurıdın # örgin  
anta etidim čit anta toqıdım yay anta yayladım yaqa anta yaqaladım bälğümin  
bitigimin anta yaratıdım ančip ol yıl küzün ilgärü yoridim tatarıy ayıtdım  
tavişyan yıl

**E9** b i s nč Y Q a : t g [ i ] / / / / / / / / / / [ W L W ] ( Y i L ) Q a : ü / / / / / B š : / # / / ( š ) ü  
ŋ z B š i : n t a i D u Q B š : k i d n t a : Y B š T W Q š : b l t r i n t ( a ) : ( n t a ) Y Y L D m : ü  
r g n : n t a : Y R T T D m : č i T n t a : T u Q i T D m : B i ŋ Y i L L Q : t ü m n : k ü n l k : b  
i t g m n : b l g ü m n n t a : Y š i T š Q a :

beşinč ayqa tägi / / / / / / / / / [ulu] yılqa / / / / / baş // # // aş öñüz başınta  
ıduq baş kedintä yavaş toquş bältirintä anta yayladım örgin anta yaratıdım  
čit anta toqıdım bñ yıllıq tümän künlük bitigimin bälğümin anta yası  
taşqa

**E10** Y R T T D m T W(uQ i T)[D m]////////////////////#/////  
//////N(y)m a: . . . Y G(i). // . . m s:ü r η[b]g g Q R a[Q]W L uQ G:N i W L R  
m s:Q i R Q z:T p a:r i D m s:s i z T š i Q η:č i k g T š G R η:t i m s:m n T š i Q Y i  
N:t i m s:k ü r B W D Q L i D a:

yaratıtdım toqıtdım////////////////////#////// yämä//////  
//// -miš ürün bägig qara qulluquy anı <üzä> olurmış qırqız tapa är idmiş siz  
taşıqın çikig taşyarın temiš män taşıqayın temiš kör budaqal ıda

**E11** Q B š L m:t i m s:ü t//////////////////////t i m s . . . . #////////////////////  
////////////////////(T)[W](Q z)[Y](η)i(Q)[a]:s ü Y W(R i D)[m]//. . . (T)W T  
uQ:B š N:č i k T p a:B i η a:i T m:i s i y r T p a:z r i T m:k ü r t i d m:Q i R Q z Q N  
i:k ü g m n:i r i n t(a)

qavišalim temiš//////////////////////temiš////#//////////////////////  
////// toquz yañıça sū yorıdım//// totoq başın çik tapa bıña idtım eši yer  
tapa az är idtım kör tedim qırqız qanı kögmän irintä

**E12** (小断片の形状から、この行は大断片の途中から始まる)

////////////////////R / . r m s:y l m s i n i s:y r i η r ü i D m s:y l m s  
i n:m n η r n t a:B š m š:T i l T W T m s:Q N i η(a)  
////////////////////// ärmiş yälmasin eš yeriñärü idmiş yälmasin  
mäniñ är anta basmiş til tutmiş qanıña

**S1** ////r k l t i:Q R L uQ:i s i η(a):k l m d ük:t i d i:r n .(t ü)Q R L uQ:T ///#////  
//////G m b n(R)////. r t s ü[g z g]:R Q R B(š)[i]:T W š i:nt a:r:Q m(š)lt N(Y)nt  
a š////k č d m:(b)i r y g r m nč Y:s(k z)y g r[m i k a]////(Y)W L uQ D[m B W]L  
č W:ü g z d a:ü č Q R L uQ G:

/// är kälti qarluq ešinä kälämädük tedi ärän/// qarluq///#////////////////////  
////// ärtiš ögüzüg arqar başı tošinta är qamiš altın yanta//// käçdim bir  
yegirmİNç ay säkiz yegirmikä/// yoluqdım bolçu ögüzdä üç qarluquy



S6 (Y)[G i]B W(L)//////////////////T W R p:y r i(n)T p a:(B)R D i:N i . # ////  
/(Y G)R W:Y G R D Q N:s k z nč Y:b n W D W:Y W R i D m:b m n:r s g ü n t a:Y  
W L a:k ü l t a:Q W T m:nt a:i r t(m)//////////////////  
////////////////

yaği bol-////////////////// turup yerin tapa bardı anı #//////////////////  
säkizinč ay bän udu yorıdım ävimin ärsägüntä yula költä qottım anta ertim ///  
//////////////////

S7 B š m L G Q W //////////////////// nč(Y)b i r W(T)z Q a:Q R L uQ G:Y  
Q(nt)#[a W](D)i Y W G R a:Y R š D a:s ü s i n:nt a:š nč D m:b i:W N k ü n:ü ŋ r a:ü  
r k p B R m š:nt a:Y N a:Y W R i p:t ü s d m:R//////////////////  
////////////////

basmilıy qodup(?) //////////////////// ay bir otuzqa qarluquy yaqınta # utdı  
yoyra yarişda süsin anta sančdım ävi on kün öñrä ürküp barmış anta yana yorıp  
tüşdim ////////////////////

S8 b i r y g r m(nč)[Y]////////////////// . D(m) . . . / W . . B W D(N)# [ŋ a](k)i  
r t m:i r l ü n t a:T L Q(m)nt a:y t d m š N W Q i:T B G č D Q i:W G z:t ü r  
ük:T[š Q]m s:nt a:Q T L m š:nt a:b g l[r]//////////////////  
////////////////

bir yegirminč [ay] //////////////////// sančdım(?) //// bodunığa # kirtim  
irlüntä talaqıminta yetdim aşnuqı tavyaçdağı oğuz türük taşıqmış anta qatılmış  
anta bağlär ////////////////////

S9 m n ŋ s ü(m):ü č . . . . .////////////////// . . . . . // # /// a:b i s y ü z:k d m  
l g:Y D G:b i r k i:š p:k l t i:k ü ŋ m:Q W L m:B W D N G:t ŋ r(i)y r:nt a:Y W(b  
i r)t i:nt a:š nč D(m)//////////////////  
////////////////

mäniŋ süm üç //////////////////// # /// beş yüz kädimliğ  
yaday bir eki saşıp kälti küñüm qulum bodunuy tñrı yer anta ayu berti anta  
sančdım ////////////////////

**S10** nt a B W D N:ič k(t i)//////////r///d g/////#///(Q R L)uQ T p  
 a:t z:p k i r t i:nt a:Y N a:t ü s p:W R uQ W N:B L Q L G:b l t r[i]n t a:l ü r g i n i:n:t  
 a:ü r(g)[p](n):i t t (d m ě).//////////  
 anta bodun içikti//////////#/// qarluq tapa täzip  
 kirti anta yana tüşüp orqun baliqlıy bältirintä el örginin anta örgipän etitdim //  
 //////////

**S11** (上部がやや狭い碑石の形状により, 最上部にはテキストが存在せず)  
 ///č Y .//////////#//////////b i r[y g](r)m  
 nč Y:y g r m i k a:Q R a:B W L uQ ü ŋ d n:š W uQ Q:Y W L i:nt a:č i g l T W T uQ  
 ////(Q).(i)/(b)//////////  
 ////////// #////////// bir yegirminč ay  
 yegirmikä qara buluq öñdün suqaq yulı anta čigil totoq//////////  
 //////////

**S12** (上部がやや狭い碑石の形状により, 最上部にはテキストが存在せず)  
 //////////#//////////. . . . . R N:T W G R  
 G W G:k č ü r ü:(b)// y n k(i)/(W R):.š nč D m:(Q R)L uQ:B š m L///// . . . t i r  
 l p:(W).//////////  
 ////////// #////////// tuγruγuy  
 kăčürü////////// sančdım qarluq basmıl////////// tirilip//////////  
 //////////

**W1** k(lt i)/// . Q R L uQ B(W D N)//////////  
 /b//////////#//////////m//////////. . . . . d i:Q N .////////// (d)p(s  
 k)[z]nč(Y ü)č Y ŋ i Q a:(Y)W R (i D)[m]//////////m T N //  
 ///////////[Q]R L uQ t i r g i:B R i:t ü r g s k a:k[i  
 r t i]//(Y)N a t(ü)s p





////////////////////////////////////  
// # ////////////////////////////////// tümän ////////////////////////////////// sančduq yerdä //////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// ekinti ay altı yegirmikä  
üç tuyluq

**W8** (t ü)[r ük]////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// # //////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// (nt a):Q T W N:y i g n i ü z b l g a b ü ñ i:  
türük //////////////////////////////////  
// # //////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// anta qatun yegäni öz bilgä  
bünü

**W9** // Q W Y i // . . . . . //////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// # //////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// [B i ŋ]Y W nt:Q(L m s)t ü m N:(uQ)W ñ:Q(L m)s  
////////////////////////////////////  
// # //////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// [bīŋ] yunt qalmiš tümän qoñ  
qalmiš

**Extra-a** (Between East-side and South-side. = S.a by Ramstedt)

//// . g G ////////////////////////////////// (ŋ a):/ k i d t /// G a: B a m š T i: W L T W(m)/  
//////////////////////////////// b i l m[z] /// i N: B(R)č a: t ü k p: t z a:  
//////////////////////////////// bamiš atı ol(?) ////////////////////////////////// bilmáz(?)  
///// barča tükäp täzä

**Extra-b** (Between East-side and South-side. = S.b by Ramstedt)

//////////y ü g r:g .////////(b)g n i g:b(n)//////////T .// . g:T . . . d  
m:B W nč a:b t g g//////////  
////////// bāgnig bān(?)//////////-dim bunča bitigig  
//////////

**Extra-c** (Between South-side and West-side. = Am Rande + S.13 by Ramstedt)

//[s ü]B š i b(n y)/(i)t b(r):b i ŋ Y W nt t(ü)m n:uQ W ĩ:b(n Q)W/////(š)nč  
D m:W Q .////R T G š/////////(nt)//(W)////////// t ü s(d)m  
//// . . a  
// [sü] baši bān//// biŋ yunt tümän qoñ bān //// sančdim//////////  
////////// tüşdim////

**Extra-d** (Between South-side and West-side. Between upper part of Extra-c and West-side)

////////// d m:[k](r)t m  
////// -dim kälürtim

( 2 ) 英訳 English translation

N1 Tāḡridā Bolmiš (*lit.*: having come into existence from heaven, or heavenly-born) El Etmīš (*lit.*: having organized the realm, or state-founder) Bilgā (wise) Qayan ////////////////////////////////////// Tölis(?) //////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////

N2 I heard that he had been sitting on the throne (or had reigned) between the two lands, i.e., land of Ötükān and that of Ögrāš. I heard that the river (in question) was Sälānjā. There that country ////////////////////////////////////// I heard that they lived and behaved in an independent state //////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////

N3 (some Yaḡlaqar noble) men who had remained (or survived) at \*\*\*\*\* //// over the people of On-Uyḡur (“Ten-Uyḡurs”) and Toquz-Oḡuz (“Nine-Oḡuz”) for a hundred years ////////////////////////////////////// the river Orqun /  
////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////

N4 I heard that the Tūrük Qayans had sat on the throne (or had reigned) exactly for fifty years. At my (i.e. 磨延曷 Moyanchuo) age of twenty-six (A.D. 739), during the reign of the Tūrüks, one \*\*\*ed peacefully //////////////////////////////////////. There //////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////

N5 Having come back (or Once again) ////////////////////////////////////// I collected and assembled my people, the Nine-Oḡuz, and took (control of) them. My father Köl Bilgā Qayan //////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////

**N6** The army started a campaign. He sent me as a leader of a regiment consisting of a thousand men to the east. When I return back from the east to Käyrä, ////  
///// with sheep and lambs ///////////////////////////////////////  
/////////////////////////////////////  
/////

**N7** having subdued /// I marched (with my army) once again. At Üč-Birkü in the river-head area of Käyrä, I joined up [with] the *qan* (= my father)'s army. Then ///////////////////////////////////////  
/////////////////////////////////////  
/////

**N8** I reached ////. Towards the TÜRÜK people with three standards who had (already) passed over the Qara-Qum (i.e. Black-sand desert) and settled at Kögär, mount KÖMÜR, and the Yar river, ///////////////////////////////////////  
/////////////////////////////////////  
/////

**N9** I heard that ÖZMIŞ Tegin had become *qan* (of the TÜRÜKS). In the Sheep Year (A.D. 743), I marched (with my army). On the 6th day of the 6th month, [I] beat (the enemy)[in] the second battle. ///////////////////////////////////////  
///// (A.D. 744) ///////////////////////////////////////  
/////

**N10** I seized (ÖZMIŞ QAYAN). There I captured his *qatun* (his wife). Thereafter the TÜRÜK people has ceased to exist. Thereupon in the Hen Year (A.D. 745), ///////////////////////////////////////  
/////////////////////////////////////  
///// (A.D. 746) ///////////////////////////////////////  
/////

**N11** the Üč-Qarluq (“Three-Qarluqs”) contemplated evil (or indulged in hostile thoughts against us), and escaped (or ran away) (from my rule). They entered into (or took refuge in) (the land of) the On-Oq (“Ten-Arrows”, i.e. Western TÜRÜKS) in



month (A.D. 749), I fought and defeated (them). I carried off their livestock, movable possessions, (unmarried) girls and widows. In the 5th month, they came to follow (me). (The people of) the Eight-Oyuz and the Nine-Tatars came entirely over (to me). I set the army in the west of (the river) Sälänjä as far as the river-head area of Šip on the south side of Yilun-Qol.

**E4** They (the enemy) came \*\*\*\*\* and calculatively scouted the river-head area of Šip. The *ayyučī* deployed(?) the army up to (the river) Sälänjä. On the 29th of the 5th month (A.D. 749), I fought and defeated (the enemy) there. I drove (the enemy) into the (edge of the river) Sälänjä, and I defeated (them). I suppressed (them) (*lit.*: made flattened). Many of them went down the Sälänjä. I crossed the Sälänjä and marched pursuing (them). I captured (some of them) in a battle, and I sent ten men (out of them as messenger).

**E5** I said, “Because of the wickedness of Tay Bilgä Totoq, and because of the wickedness of one or two notables, my common people!, you had to die or got lost, submit (to me) again. (Then) you will not die or get lost.” I said, “Serve me as before.” I waited for two months but they did not come. On the 1st day of the 8th month (A.D. 749), I said, “I will set out with the army.” At the very moment when the standard (of my army) was going to set out,

**E6** reconnoitring men came in. They said, “The enemy is coming.” The commander marched with the enemy and came near. On the 2nd day of the 8th [month], I marched along (the river) Qasuy from the lake Čiyiltir, and fought and defeated (them) there. From there I chased (them). On the 15th day of the same month, we (*lit.*: ‘I’) fought a jumbling battle with the Tatars and beat (them) at Üč-Birkü in the river-head area of Käyrä. Half of the people

**E7** surrendered (to me) and half of the people entered [into] \*\*\*\*\*. I turned back from there and dismounted (to settle down). I spent the winter on the north side of the Ötükän (mountains). I got rid of the enemy and became free. I gave my

two sons the title of *yabyu* and *šad*. I gave them to the people of the Tarduš-section and of the Tölis-section (as their leaders). So much for that, in the Tiger Year (A.D. 750), I marched towards the Čiks. On the 14th day of the 2nd month, I beat (them) at the (riverside of) Käm.

**E8** [On the \*\*\*th day] of the same month, I had (my) throne set up there at the western extremity of the Ötükän (mountains), at the river-head area of the Tez, and to the west of Qasar. I had a stockade driven into the ground. In summer, I settled our summer camp there. I fixed the frontier (of my realm) there. I had my sign and memorial record inscribed there. So much for that, in the autumn of that year, I marched eastwards. I compelled the Tatars to inquiry.

**E9** Until the 5th month of the Hare Year (A.D. 751), ///. In the [Dragon] Year (A.D. 752), I spent the summer at the confluence of the Yavaš and Toquš (rivers), in the west of İduq-Baš (which is) in the river-head areas of //-Baš and /// Aš Öñüz. I had (my) throne set up there. I had a stockade driven into the ground. I had my monumental record and sign to last for a thousand years and ten thousand days inscribed on a flat stone there.

**E10** I had (the memorial stone) driven into the ground. // and I heard that // I heard that he (the Yabyu of the Qarluqs?) ruled <over> white (noble) Bägs and black (common) slaves. I heard that he sent a man (as messenger) to the Qırqız and said, “You, set out and bring out the Čiks! Then I will set out myself.” I heard that he said, “Look!

**E11** Let’s assemble together at the Budaqal forest!” // // I heard that he said // on the 9th day, I marched with my army. I sent to the Čiks a regiment of a thousand men with \*\*\*\* Totoq as (their) commander. I sent a few people (as messengers) to the land of his comrade. I said, “Look! (or, Obey me!)” I heard that the Qırqız Qan // on the north side of the Kögmän (mountains).

**E12** I heard that he sent his reconnoitring soldiers to the land of his comrade. I heard that my men made a surprise attack on his reconnoitring soldiers there and captured a soldier who informs: “\*\*\*\*\* men came to his (Qırqız’s) Qan.

**S1** (However) the Qarluqs did not come to their comrade (or, they did not come to the comrade of the Qarluqs).” (Thus) he (the informer) said. The men  
///// the Qarluqs ////////////////////////////////////// I crossed the Ārtiř river at the pool? (or pond?) of the river-head area of Arqar, [because] men [spread?, or supported?] reed (raft?, or bridge?) at the lower side. On the 18th day of the 11th month, I met \*\*\*\*\* on the way. There I beat the (troop of) Three-Qarluqs (situated) around the river Bolču.

**S2** I turned back from there and dismounted (to settle down). My regiment of a thousand men came driving the Ćik people. /////////////// I made the summer camp within(?) my stockade of(?, or built at?) the river-head area of Tez. I fixed the frontier (of my dominions) there. I nominated a *totoq* for the Ćik people and then presented (them with the titles of) *iřbaras* and *tarqans*. ///////////////  
//// a man (a scout) came.

**S3** He saw from the mountain \*\*\* near the lake Qazluq. He came, saying “The enemy is coming.” On the 15th day, /////////////// I (and my army?) assembled at the lake Tayyan. I dispatched a royal tent-maker (as entourage) from there. (The?) [man] came. Passing over Qara-Yotalqan, he brought (them). I marched against [them]. ///////////////  
//////// they became //////////////

**S4** I heard that he (a man of the Basmils?) sent men (soldiers or scouts?) towards the Qarluqs. I heard that he said ///////////////. I heard that he said, “Inside, I will produce a state of disorder,” and “From outside, I will \*\*\*\*\*.” Becoming my enemies, the Basmils went towards my (royal) tent. I could not subdue them.



**S10** There the people submitted (to me). // They ran away and entered into (the land of) the Qarluqs. Having turned back from there and dismounted, I had the throne of the realm set up at the confluence of the Orqun and Baliqliy (rivers). //

**S11** // On the 20th day of the 11th month (A.D. 753), at Suqaq-Yulı in the east of Qara-Buluq, the *totoq* of Čigil //

**S12** // making (my army) cross over Tuγruy // I defeated (them). The Qarluqs and the Basmıls // being alive //

**W1** they came. // the Qarluq people // on the 3rd day of the 8th month (A.D. 754), I marched. // those of the Qarluqs who had survived went away and entered into (the land of) the Türgiř. // again dismounting,

**W2** on the 2nd day of the 10th month, // He came. I heard that // \*\*ed to the north. // I dismounted (to settle down). From there to the frontier (of my realm), the Basmil and Qarluq people disappeared. In the Sheep Year (A.D. 755),

**W3** I settled down at // and spent the summer. // [In the Monkey Year (A.D. 756)] // I heard that the emperor of China (i.e. 玄宗 Xuanzong) ran away to the west (from the capital 長安 Chang-an). // I put (or abandoned?) his son (i.e. 肅宗 Suzong) //

//////////////////////////////////// people //////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// I had (it) driven //////////////////////////////////. Staying there (= Setting the  
headquarters), I made an ornamental flag of fortune for the (royal) tent (or  
encampment).

**W4** My (royal) tent is wide ////////////////////////////////// I went ////////////////////////////////// people (acc.), fortune  
//////////////////////////////////// On the 6th day of the 2nd month, I dismounted (to settle  
down) at my (royal) tent. In the Hen Year (A.D. 757), I settled down //////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// [In the Dog Year (A.D. 758)] //////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// he gave in order to //////////////////////////////////. I heard that  
he annihilated \*\*\*\* clan thoroughly. Thus, he came and gave (me) the two daugh-  
ters (Princesses 寧国 Ningguo and 小寧国 Xiao Ningguo)

**W5** for (my) serve. ////////////////////////////////// will \*\*\*\* and go //////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// my (royal) tent ////////////////////////////////// He (presumably an  
ambassador from Suzong) said, “I will not commit a sin to His Majesty.” He said, “I  
will not make mistakes (or misbehave). We should become as before.” //////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// I had Bay-Baliq  
built on the Sälärjä for the Sogdians and Chinese (who had probably come or been  
brought from China because of the 安祿山 An Lushan and 史思明 Shi Siming  
Rebellion).

**W6** //////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// the flag  
//////////////////////////////////// they assembled and came. ////////////////////////////////// on the 21st  
day [of the \*th month], //////////////////////////////////  
[on the \*\*th day of the \*th month], I defeated (them) there. Between Yariš and  
Ayuluy, within the river-head area of Yätük,

**W7** //////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// ten thousand

//////////////////////////////////// at the place where (we) defeated (the enemy)  
////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// on the 16th day of the 2nd month (A.D. 759), the Türiüks with three  
standards

**W8** //////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// there, the nephew  
of the *qatun*, Öz Bilgä Büñi

**W9** //////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// I heard that  
[one thousand] horses remained and ten thousand sheep remained (to be with me).

**Extra-a** ////////////////////////////////////// his horse that was tied  
//////////////////////////////////// not knowing(?) //// exhausting all \*\*\*, running away

**Extra-b** ////////////////////////////////////// the beer (acc.)////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// I \*\*\*ed. Thus ////////////////////////////////////// inscription (acc.)////////////////////////////////////

**Extra-c** /// I was the [army] commander. ////////////////////////////////////// I \*\*\*\*\*ed one thousand  
horses and ten thousand sheep //// I defeated (them). //////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// I dismounted (to settle down). //////////////////////////////////////

**Extra-d** // //// I \*\*\*\*\*ed and brought.

(3) 和訳 Japanese translation

- N1 テングリデ=ボルミシュ (天より生まれた) エル=エトミシュ (国を建てた)  
ビルゲ (賢い) <sup>カガン</sup>可汗 ///  
テリス (?) ///  
////////////////////////////////////
- N2 オテケケン地方とオグレシュ地方, その2つの間で支配していたという.  
その河はセレンゲであったという. そこにてその国 ///  
//////////////////////////////////// 独立して生活していたという. ///  
////////////////////////////////////
- N3 \* \* \* \*に留まった者(あるいは生き残った者)が民衆であるオン=ウイグル  
(十姓ウイグル)とトクズ=オグズ (九姓オグズ, 九姓鉄勒)の上に百年間  
//////////////////////////////////// オルホン河 //////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////
- N4 突厥の可汗(たち)はまるまる 50年間支配していたという. 突厥の統治時代  
に, 私 (磨延曷) の 26歳の時 (739年) に, 平和裡に //////////////////////////////////////  
与えた (または, \* \* \* した). そこで //////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////
- N5 戻って (または, 再び) ////////////////////////////////////// 私は私のトクズ=オグズの民を集め  
に集めて掌握した. 私の父であるキョル=ビルゲ可汗は //////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////
- N6 軍隊が進んだ. 私自身を彼は東方へ千人隊長として派遣した. ケイレに東  
方から私が戻ってくるような時に, 羊・小羊のいる //////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////

**N7** 征服して、私は再び進軍した。ケイレの河源地帯にあるウッチ=ビルキュ  
で、私はカン(父のキョル=ビルゲ可汗)の軍隊[と]合流した。そこで  
////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////

**N8** に私は到着した。(既に)カラ=クム(黒沙砂漠)を渡ってしまっており、  
キョゲルやキョミュル=ターグ(炭山)やヤール河に(いる)三纛突厥の民に  
対して、////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////

**N9** オズミシュ(烏蘇米施)=テギンが(突厥の)カンになったと聞いた。羊歳  
(743年)に、私は出軍した。6月6日に2回目の戦い(で敵)を[私は]  
打ち負かした(?)。////////////////////////////////////(744年)  
////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////

**N10** 私は(オズミシュ可汗)を捕らえた。そこで彼の可敦(可汗の正妻)を捕虜  
にした。その時以来、突厥の民はいなくなった。その後、鶏歳(745年)に  
////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////(746年)////////////////////////////////////

**N11** 三姓カルルクは敵意を抱いて(私の支配下から)逃げて行った。西の方、  
オン=オク族(十箭すなわちもとの西突厥)(の地域)に竄入した。豚歳(747  
年)に、9[都督]////////////////////////////////////民衆  
(?)////////////////////////////////////を感じて、

**N12** 彼(父で初代のキョル=ビルゲ可汗)が(私を)ヤブグ(葉護)に任命した。  
その後、私の父である可汗はみまかった。民衆の行い////////////////////////////////////、鼠歳(748  
年)に、////////////////////////////////////[ここに磨延啜の可汗即位記事がある  
はず]////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////タイ=ビルゲ都督を

**N13** ////////////// 民衆 //

//////////////// [牛歳 (749 年) に] ////////////////////////////////////// 私  
は  
\* \* \* し,

**E1** 捕まえた。//// (749 年) 3 月 1 日にビュケギユクにて私は (敵に) 追い付いた。夕方、陽が沈んでいく時、私は戦って、そこで勝った。昼が[壊され]夜が消されたビュケギユクには、セキズ=オグズ(八姓オグズ)族もトクズ=タタル(九姓タタル)族も残らなかった。(その月の)2日には、陽が昇る時に私は戦った。民は(可汗である)私の奴婢(である)、と天

**E2** 地(の神)が(私に)仰せになった。そこで私は(敵に)勝った。罪のある名士たちを\* \* \* \*天は(私のために)捕まえて下さった。名もない民衆たちを私は抹殺しなかった。彼らのテント(家)・家財・家畜を私は奪わなかった。私は(彼らに)肉体刑を言い渡した。(しかし)私は(彼らを)立ち上がらせて(もとの生活を立ちゆかせて)おいた。「私のものたる民たちよ!」、 「(私に)ついて来い」と私は言った。私は(彼らを)残しておいて立ち去った。(しかし)彼らはやって来なかった。また以前のように

**E3** 私は(彼らを)追いかけた。私はブルグで(彼らに)追いついた。(749 年) 4 月 9 日(または 29 日)に私は(彼らと)戦って勝った。彼らの家畜・動産・娘・寡婦を私は運び去った。5 月に彼らは(私に)従属しに来た。セキズ=オグズ(八姓オグズ)族・トクズ=タタル(九姓タタル)族は一人残らずやって来た。セレンゲ(河)の西のイルン=コルの南側のシブの河源地帯に至るまで、私は軍を配置した。

**E4** 彼ら(敵)は\* \* \* \*計略的にシブの河源地帯を偵察しにやって来た。アイグチはセレンゲ(河)に至るまで軍を展開(?)した。(749 年)5 月 29 日に、私は戦って、そこで勝った。私は(敵を)セレンゲ(河畔)に追い詰めて勝った。私は平定した。彼らの多くはセレンゲを下って行った。私はセレ

ングを渡り、(彼らを)追って進軍した。戦闘で捕虜にして、(その中から) 10人(敵方に伝言させるために)派遣した。

**E5** 「タイ=ビルゲ都督の卑劣さのゆえに、一・二の名士(貴人)の卑劣さのゆえに、私の平民よ！ 諸君は死んだり、路頭に迷ったりした。再び(私に)臣属せよ。(そうすればもう)死なないであろう、路頭に迷わないであろう」と私は告げた。「以前のように私に奉仕せよ！」と私は告げた。2ヶ月私は待ったが、彼らはやって来なかった。(749年)8月1日に私は「軍を出そう」と言った。(軍の)麤が出陣しようとしたちょうどその時に、

**E6** 偵察の者が帰ってきた。「敵が来る」と彼らは告げた。敵と共にその首領が進軍してきた。8[月]2日にチギルティル湖畔よりカスイ(河)に沿って行進し、私は戦った。そこで勝った。そこから私は追撃をした。その月の15日に、ケイレの河源地帯のウチ=ビルキュで、タタル族と入り乱れて(戦い)、私が打ち負かした。その半分の民は

**E7** (私に)服属した。その半分の民は\*\*\*\*に竄入した。そこから私は引き返して、下馬した(居を落ち着いた)。オテュケン(山)の北側で私は冬営した。私は敵から解放され自由になった。私は2人の息子にヤブグとシャドの称号を与えた。私は(彼らを)タルドゥシュ(右翼)とテリス(左翼)の民に(それぞれの長として)与えた。そうして虎歳(750年)に、私はチク族に向けて出軍した。2月14日にケム(河畔)で

**E8** 私は(彼らを)打ち負かした。その月の[\*\*\*日に]オテュケン(山)の西の端で、テズの河源地帯にて、カサルの西にて、私は玉座をそこに設置させた。私は塙柵をそこに打ち立てさせた。夏にそこで私は夏営した。私はそこに国境を設定した。私はそこに私の標識と碑文を作らせた。そうしてその年の秋に私は東へ向けて進軍した。私はタタル族を査問した。兎歳(751年)

**E9** 5月まで、////////////////////[龍]歳(752年)に////////////////////=バシユと\*\*\*アシユ=オンギユズの河源地帯にあるイドウク=バシユの西方にて、ヤヴァシユ(河)とトクシユ(河)の合流地点にて、そこで私は夏営した。私はそこに玉座を創設させた。私は墻柵をそこに打ち立てさせた。千年万日まで続く私の碑文と標識とを、そこに平らな石にて

**E10** 作らせた。私は(それを)打ち立てさせた。////////////////////  
//////////////////// また ////////////////////// という。(カルルク族のヤブグが?) 白い(高貴な)ベグと黒い(卑しい)奴隷、そのく上に>君臨したという。彼はキルギス族の方へ人を(使者として)派遣したという。「おまえたちは出動せよ! チク族を出動させよ!」と告げ、「私も出動しよう」と彼は言ったという。「注目せよ! ブダカルの森で

**E11** 我々は集まろう!」と言ったという。//////////////////// と  
言っ  
た  
い  
う。  
//////////////////// 9日に、私は軍を出動させた。  
\*\*\*都督を隊長としてチク族に向けて千人隊を派遣した。彼の同盟者の土地に向けて私は少数の人を(使者として)派遣した。「見よ!(または、従え!)」と私は言った。キルギスのカンはキョグメン(曲漫山)の北側で

**E12** ////////////////////// であつたという。彼は自分の偵察隊を同盟者の土地へ送つたという。その偵察隊を私の部下がそこで急襲し、情報提供者を捕まえたという。「彼ら(キルギス)のカンに向けて

**S1** \*\*\*\*人が来た。カルルク族は彼らの同盟者のもとへは来なかつた(または、彼らはカルルク族の同盟者のもとへは来なかつた)」と彼(情報提供者)は言った。男たち////// カルルク族 //////////////////////////////////////  
//////////////////// エルティシユ(イルティシユ)河を、アルカルの河源地帯の沼地にて男たちが葦(の筏?橋?)を下側で敷き詰めて?支えてくれたおかげ

で?], 私は渡河した。11月18日に、私は\*\*\*に遭遇した。ボルチュ河にいた三姓カルルク族を

S2 私はそこにて打ち負かした。そこから私は引き返して、下馬した(居を落ち着けた)。チクの民を私の千人隊が駆り立てて来た。////////////////////// テズの河源地帯の(?)私の墻柵を私は夏营地とした。私はそこに国境を設定した。私はチクの民に都督を任命した。私はイシュバラやタルカン(の称号)をそこで(彼らに)賜与した。////////////////////// 人(兵士?斥候?)が来た。カズルク湖付近の

S3 \*\*\*\*山から彼は見た。「敵が来ている」と言いつつ彼は来た。15日に、////////////////////// タイガン湖に私は集合した。(腹心の部下である)帳幕設営人をそこから私は派遣した。(その?) [人] が来た。カラ=ヨタルカンを越えて連れてきた。[それに] 対して私は進軍した。//////////////////////  
////////////////////// となった。カルルク族

S4 に向けて彼(バスミル側の者?)は人(兵士?斥候?)を派遣したという。////////////////////// と彼は言ったという。「内にて私はかき乱そう」、「外から私は////////////////////// しよう」と彼は言ったという。バスミル族が敵となって私の帳幕(本営)の方へ向かって行った。私は彼らを服従させられなかった。外から三姓カルルク族が3つの聖山であるオテユケン//////////////////////  
////////////////////// オテユケンで私は

S5 //// そこで////////////////////// (753年)6月21日に、私は戦った。そこで私は勝った。イチユイを越えていって、\*\*\*\*を直接私は敗走させた。その後、テウルギシュ(突騎施)族がカルルク族から財物とテント(家)を掠奪し去ったという。私は私の帳幕(本営)に下馬した(落ち着いた)。//////////////////////  
//////////////////////

S6 敵となり////////////////////// 立ち上がって、彼らの土地に向かって行った。彼らを////////////////////// ??? 8月、私は追いかけて進軍した。

私の帳幕 (本営) をエルセギユンにあるユラ湖 (畔) に置いた。そこから私は追いかけた。 ///  
////////////////////////////////////

S7 バスミル族を [放置しておいて?] //////////////////////////////////// \*月 21 日にカルルク族を近くで彼は [敗] った。ヨグラ=ヤリシュ (平原) で、私はその軍をそこで敗走させた。彼らのテント (家々) は 10 日前に驚いて立ち去ったという。私はそこから引き返して進軍して、下馬した (本拠に落ち着いた)。 //

S8 11 [月] に (または、\* \*月11日に) //////////////////////////////////// [私は敗走させた?] ////////////////////////////////// 私は\* \* \* \* の民のもとへ入った。イルリエンにあるタラキミンで私は (敵に) 追いついた。かつて唐にいたオグズ族と突厥族が出てきたという。そこで合流したという。そこでベグたちは //

S9 私の軍は 3 //////////////////////////////////// 500 人の軽装歩兵が一人二人と数えあってやって来た。民は (ウイグル可汗である) 私の奴婢 (である)、と天地 (の神) が (私に) そこで仰せになった。そこで私は (敵に) 勝った。 //

S10 そこで民衆は (私に) 服属した。 //  
///////カルルク族の方へ逃げていった。そこから私は引き返して下馬し (本拠に落ち着き)、オルホン (河) とバリクリク (河) の合流点に国の玉座をそこに造営させた。 //

S11 ////////////////////////////////// (753 年) 11月 20 日に、カラ=ブルクの東方のスカク=ユリ、そこにてチギル都督は //

**S12** ////////////////////////////////////// (私の軍に) トゥグルグを越えさせて, //////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// 私は勝った. カルルク族とバスミル族は ////////////////////////////////////// 生き延びて //////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////

**W1** 彼らは来た. ////////////////////////////////////// カルルク族の民 //////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// (754年)8月3日に私は進軍した. //////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// カルルク族の生き残りは出発  
して, テュルギシュ族のもとに竄入した. ////////////////////////////////////// 再び下馬して,

**W2** 10月2日に, //////////////////////////////////////  
////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// 彼は来た. 北に\*\*  
したという. ////////////////////////////////////// 私は下馬した. そこから国境まで  
バスミル族とカルルク族はいなくなった. 羊歳(755年)に,

**W3** \*\*\*で, 私は腰を落ち着けて, 夏営した. //////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// [猿歳(756年)に] ////////////////////////////////////// 唐のカン(皇帝, ここでは玄宗)が  
(首都の長安から)西の方へ亡命していったという. ////////////////////////////////////// 彼の息子  
(すなわち肅宗)を私は置いた(設置した?または, 放置・黙認した?).  
//////////////////////////////////// \*\*\*  
の民衆 ////////////////////////////////////// \*\*\*を私は打ち立てた. そこに  
留まって, 私はその帳幕(本営)のために幸運の装飾用纛を飾り付けた.

**W4** 私の帳幕は広く, ////////////////////////////////////// 私は行った. ////////////////////////////////////// 民衆を, 幸運 //////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// 私の帳幕(本営)に, 2月6日に下馬した.  
鶏歳(757年)に, 私は居を定めた. //////////////////////////////////////  
//////////////////////////////////// [犬歳(758年)に] //////////////////////////////////////  
\*\*\*するために彼は与えた. 彼は???一族をひどく滅ぼしたという.  
そうして彼はやって来た. 2人の生娘を

**W5** (私に)奉仕に出[した?]. ////////////////\*\* \* \* して行くだらう. ////////////////  
////////// 私の帳幕(本営), その(?) ////////////////  
////////// 「私は(可汗?)殿に背くまい」と彼(肅宗の使者と推定)は言った。「私は誤りを犯すまい」と彼は言った。「以前のようになろう!」 ////////////////  
////////// 私はソグド人と漢人のためにセレンゲ河畔にバイバリク(富貴城)を建設せしめた.

**W6** ////////////////  
////////// その彙を //////////////// 彼らは一緒になってやって来た. //////////////// [\*月] 21 日に ////////////////  
////////// [\*月\*\*日]にそこにて私は勝った.  
ヤリシュとアグルグとの間で, イエテユクの河源地帯の間で

**W7** ////////////////  
////////// 万 //////////////// 勝利した場所 ////////////////  
////////// (759年) 2月 16日に三彙

**W8** 突厥 ////////////////  
//////////  
//////////  
////////// そこにて可敦の甥であるオズ=ビルゲ=ビュニ

**W9** ////////////////  
//////////  
//////////  
////////// [千](頭の)馬が残ったという. 万(匹の)羊が残ったという.

**Extra-a** ////////////////////////////////////// 繫いだ彼の馬 //////////////////////////////////////  
//// 知らない(?) //////////////// \*\*\*を全て尽くして、逃げて

**Extra-b** ////////////////////////////////////// 麦酒を ////////////////////////////////////// 私は\*  
\*\*した。こうして碑文を //////////////////////////////////////

**Extra-c** //// 私は[軍隊の]長であった。 ////////////////////////////////////// 千(頭の)馬と(万匹の)  
羊を私は ////////////////////////////////////// 私は勝った。 //////////////////////////////////////  
//////// 私は下馬した。 //////////////////////////////////////

**Extra-d** //////////// 私は\*\*\*した。私はもたらした。

## 5. 訳注

ここでは第2章の考察であげた旧版以前の全訳や、旧版の出版以後に発表された全訳(Каржаубай 2002; Berta 2004; 耿世民 2005)との違いを逐一注記することはあまりにも煩瑣になるので、行なわない。また本碑文の内容を、漢籍史料と比較検討した歴史学的研究として、王静如 1938; Ögel 1951; 羽田 1957; 片山 1984; 川崎 1993; 片山 1994, pp. 10-14; 石見/北條 1994, pp. 15-21 などがあるが、これらに取り上げられた点をすべて指摘することはせず、重複を避けて必要な部分のみに言及する。

なお、旧版の出版以後、シネウス碑文を直接の考察対象に取り上げたものとして、カザフスタンのカマロフが出版した論文があるが(Kamalov 2003)、彼は旧版の存在を知らず、それ以前の古いテキストに依拠しているため、残念ながらテキスト本文についての新知見は皆無であった。ただ、解釈については我々も注目すべき新見解があるので、それは訳注において言及する。

**N1, täpřidä bolmĩš el etmĩš bilgä qayan:** täpřidä bolmĩš なる成句については、護雅夫の著作(護 1967)に対する村山七郎の書評(村山 1968)中に異論があるにもかかわらず、護を含む先学の考えに従って「天より生まれた」と訳したい。確かに bol- の原義は、村山の主張するように、状態の変化を示す「成る」であって、「生まれる」ではない。実際、古代トルコ語で「生まれる」を意味する語としては tuy- がある。しかし、bol- の反対表現である yoq bol-「なくなる、存在しなくなる、滅亡する」は、目の前からいなくなる状態をいうのであって、その反対は目の前に現れることと考えてよからう。天からやって来て目の前に現れ、存在するようになる状態を指して「生まれる」と翻訳してもなんら不都合ではあるまい (cf. ED, p. 331; Klyashtorny 1982, p. 343; SCMT, p. 222)。

ところでこの人物は、東ウイグル可汗国第2代可汗である登里囉没蜜施頡駼德蜜施毗伽可汗(葛勒可汗)、すなわち磨延啜を指す。その在位は 748~759 年である。磨延啜が正式に可汗として即位するのは、タリят碑文 S5-6 より判明した通り 748 年である。しかし、漢文史料とシネウス碑文の双方から確認されるように、初代可汗は 747 年に亡くなっているから (cf. 羽田 1957, p. 182)、実権はその時から握っていたはずで、漢文史料もそのことを反映している (cf. 石見/北條 1994, pp. 18-19)。なお、この人物がシネウス碑文の主人公であるから、この冒頭部分に碑文のタイトルがあったことは疑いない。

**N2, ögräš eli ekin ara:** ögräš はラムシュテット以来 täg(i)räs(i) と読まれてきたもので (Ramstedt 1913, p. 13)、クローソンは tägrä-si「その周辺」かと考えた (ED, p. 485b)。これと平行する表現を持つタリят碑文が学界に初めて紹介された時も、その紹介者のシネフーは、E3 の対応箇所を同様に読んだ (Шинэхүү 1975, p. 82)。Tekin 1983, p. 46 でもやはり tägräs としている。さらに 1974~1975 年にシネウス碑文を実際に調査したクリヤシュトルヌイも、この語を tägräsi と読み、ラムシュテットが不明とした部分を含め全体を ötükan eli tägräsi eli ekinti olurmĩš とし、タリят碑文 E3 の対応箇所を ötükan eli tägräsi eli ekinti (and not ekin ara) とすべきことを主張した (Klyashtorny 1985, pp. 148-149)。

ただし Klyashtorny 1982, p. 342 では ötükan eli tägiräs eli ekin ara としていた。いずれにせよ我々がシネウス・タリアト両碑文を精査したところでは, tägräsi ではなく ögräs であり, ekinti ではなく ekin ara であった。確かにシネウス碑文では表面の風化が進んでいて読みにくい, タリアト碑文の対応箇所は明瞭に読みとれ, ögräs と ekin ara であることに一点の疑いもない。なお, 『大慈恩寺三蔵法師伝』巻 5 (中外交通史籍叢刊 2, 中華書局, 2000, p. 117) に「在兩山間」とある原文を, ウイグル訳本では [i]ki tay ikin ara と表現しており (Tyrymeba 1991, p. 69), ikin (= ekin) の解釈に手がかりを与える。また, el は i と l との 2 文字でも l の 1 文字のみでも表記されるので, シネウス碑文では ögräsi eli とも読めるが, タリアト碑文の書き方と比較すればやはり ögräs eli と読む方が妥当であろう。

**N2, ermiş barmış:** ED, p. 194a を参照。

**N3, su-////-nta qalmışi bodun on uyğur toquz oğuz üzä yüz yıl # ////:** ラムシュテットがここを「[ある河の流域]に留まった民衆がオン=ウイグルとトクズ=オグズの上に 100 年間支配して」と訳す (Ramstedt 1913, pp. 12-13) のに対し, ハミルトンは, バザンの意見も容れて, 「[セレンガ?] 河の流域に留まった者(を含む)人々たるオン=ウイグルがトクズ=オグズの上に 100 年間支配して」と訳した (Hamilton 1962, pp. 39, 59)。しかし本稿は qalmışi の -i に着目し, ここまでが文の主語と考え (cf. GOT, p. 179), 「[ある場所]に留まった(あるいは生き残った)者が民衆であるオン=ウイグルとトクズ=オグズの上に 100 年間」と解釈することにする。ある場所に留まった(あるいは生き残った)者とは, おそらく葛勒可汗(磨延啜)の直接の祖先になるウイグルのヤグラカル氏族, すなわちオン=ウイグル(十姓ウイグル)の中の支配氏族, ないしはヤグラカル氏出身の貴人たちを指すのではなかろうか。ここに見える「100 年間」の解釈については次注を参照。ところで, ラムシュテットが yüz yıl の後に読んでいた olurup「支配して」は, 現在の残画がその読みと矛盾しないことを確認することさえ不可能であった。なお, トクズ=オグズ(九姓オグズ, 九姓鉄勒)とウイグルの関係については, 片山 1981 を参照。

**N4, türük qayan čaq:** ラムシュテットがテキスト本文 (Ramstedt 1913, p. 13) で *tör... BčQ* と翻字し、訳注部分 (p. 44) で *türk Q i B č Q* (Türk Qibčaq) と読む可能性を示唆したところを、本稿はこのように復元する。実はこの部分にキプチャク (Qibčaq ~ Qipčaq) という民族集団名が読みとれるか否かは、トルコ学のみならずユーラシア史全体の大問題である。なぜならば、もしその読みが正しければこの名前が史上に現れる最初の史料になるからである。クリヤシュトルヌイによれば、ラムシュテット自身はその翌年の論文では信念をもって Qibčaq と読んだが、慎重なバルトリド・ペリオ・ミノルスキーらはキプチャク族に関する論文やコメントの中でいずれもこれを無視したという (Kljaštornyj 1988, p. 74)。その一方で、トルコ文献学者のマロフらは、この読みを踏襲してきた (cf. PDPMK, pp. 30, 34)。クリヤシュトルヌイは、サンクト=ペテルブルグに所蔵されるラムシュテット拓本では *čQ* の 2 文字しか判読できなかったが、自身が 1974~75 年にモンゴルの学者シネフーと共に行なった現地調査によって、2 人は前半の *türk* に全く疑問の余地がないこと、さらに後半も [qī]bčaq と読めることを確信したといい (Kljaštornyj 1988, p. 75)、一文をものしている。しかしながら我々は、この読みにもそれを補強するために展開した同氏の議論にも従うことはできない。同氏らが [qī]bčaq 即ち翻字に直せば [Q i] B č Q と読む所を、本稿は (QGN):čQ と読む。即ち語頭の Q を読む点では一致するが、3 文字目の B を N と読み直した。ルーン文字では後舌の B と N が共に右に膨らむ弓形のストロークを持っているのであり、文字が欠けている場合には混同されやすいのである。我々は、後に黒海沿岸にまで進出するベチェネーグ族さえまだバルハシ湖の東方にいた (cf. 森安 1977, pp. 30, 32) この時代に、キプチャク族がそれよりさらに東にいたなどと信ずることは到底できない。バルトリド・ペリオ・ミノルスキーらも、8 世紀中葉のウイグルのシネウス碑文の冒頭部にいきなりキプチャク族が現れるのは不自然と考えたが故に、ラムシュテットの提案を無視したのであろう。本稿は、問題の箇所を含む一文を *türük qayan čaq aliğ yıl olurmüş* と復元し、「突厥の可汗(たち)がまるまる 50 年間(ウイグ

ルに先行してモンゴリアを)支配していたという」と解釈する。いうまでもなくそれは突厥第二可汗国がオルホン河畔に本拠を置いて、モンゴリアを約 50 年間支配していたことを指すに違いない。前行の「オルホン河」は、やや離れてはいるが、おそらくこちらの文脈にかかるのであろう。

さて、シネウス碑文の最初の紀年は、この記事の直後にある「私の 26 歳の時 (739 年) に」である。そこからさかのぼって 50 年となれば、689 年ごろになる。岩佐精一郎によれば、漠南で復興した突厥第二可汗国が漠北のオテケン山を再び制圧したのが、686 年末から 687 年前半期であるから (岩佐 1936, p. 131)、シネウス碑文は、漠北制圧以後を突厥の治世と判断していることになる。一方、タリアト碑文にも冒頭の E4 に年数の記述があり、片山 1999, p. 172 では、「70 年の間、統治したという。\* \* 年が過ぎた」と読まれていた。しかし今回、阪大所蔵拓本を再確認したところ、この部分を (lt) m š Y i L W R m # [s] (lt) m š Y i L B R m s = altmīš yil olurmīš # altmīš yil barmīš 「60 年の間、統治したという。60 年が過ぎたという」と新たに読むことができた。タリアト碑文では、シネウス碑文同様、この年数の記述の直後からウイグルによる突厥討滅の記事が現れ、その最初の紀年は「私の 28 歳の時に、蛇歳 (741 年) に」であるので、この二度繰り返される 60 年とはやはり突厥第二可汗国の治世を指しているものと判断できる。シネウス碑文の記述より 10 年も治世が長くなっているのは、タリアト碑文では、突厥が漠南で復興した 682 年から突厥の治世と考えているためだろう (741 年 - 60 年 = 681 年)。

では、両碑文における突厥統治年数の差はなぜ生じたのか。そもそも両碑文が突厥の歴史を記述しているのは、ウイグルが、突厥を自分たちの先駆者であると見なしていたため、突厥・ウイグル両者を包含するようなトルコ民族史を描こうとする意識があったためと考えられる。ウイグルが突厥を自らの先駆者とみなしていたことは、西ウイグル国時代の史料ではあるものの、ウイグル文書中の歴史文献として知られる U1 文書の中で、突厥の武人宰相ビルゲ=トニユククの名が現れていることから既に指摘されているのである (森安 2002,

pp. 149-150). そうした前提に立った上で両碑文の年数の差異を考察すると、タリアト碑文は、唐の羈縻支配から脱して突厥が再び独立を勝ち取ってからの年数、つまりはトルコ民族全体の歴史を描こうとする意識が強く現れ、一方のシネウス碑文は、突厥第二可汗国が聖地たるオテュケン山を再び制圧してからの年数、すなわちオテュケン山を保つ者をトルコ民族の正統なる支配者として捉えようとする意識が強く現れていると考えられる。また、シネウス碑文においては、N3に「民衆であるオン=ウイグル（十姓ウイグル）とトクズ=オグズ（九姓オグズ、九姓鉄勒）の上に100年間」という記述も見られる。ここに現れる100年間オン=ウイグルとトクズ=オグズの上に君臨したであろう主体は、前注でも見たように、ウイグルの支配層である。シネウス碑文の最初の紀年である739年から100年遡ると639年であるが、その当時のウイグルの指導者は菩薩という人物で、貞観の始め頃に突厥第一可汗国を薛延陀とともに攻め、貞観四（630）年に第一可汗国が滅んだ後には強勢を誇ったという（『旧唐書』卷195、迴紇、pp. 5195-5196）。つまり、シネウス碑文はこの菩薩の治世をもってウイグルの勃興と考え、オテュケンの支配者である突厥の治世と平行して、ウイグル自身の歴史を概観する形で、碑文の冒頭を執筆し始めているのである。

**N4, türük eliqä:** ジローは接尾辞 -nä / -ŋa を「時間を示す与格」であると説明するが (Giraud 1961, pp. 66, 120), テキンはこの接尾辞をあくまで「行為する場所を示す与格」に分類しており (GOT, p. 132), 議論が分かれている (cf. OTWF, p. 605). そもそも el は、一般的には人間の集団としての「国」を指し、「国土」という意味はそこから派生したものである。この el が特定の支配者／王朝を受けた上で与格の接尾辞 -nä をとった場合、「～の治世／統治時代」という意味を持つことは、(1) トニユクク碑文第1行目、(2) トニユクク碑文第58行目、(3) オンギ碑文・東(正)面第4行目の3例から帰納できる。(1) *bilgä toñuquq bän özüm tavyaç eliqä qilintim* 「ビルゲ=トニユククこと私自身は唐の統治時代に生まれ育った」、(2) *türük bilgä qayan eliqä bititdim bän bilgä toñuquq* 「突厥のビルゲ可汗の治世に私ことビルゲ=トニユククが書かせた」、(3) *qapyan eltäriš*

qayan elinā qilintüm「私はカプガン=エルテリシュ可汗(黙噉)の治世に生まれ育った」。

**N4, alti otuz yaşima:** 「私の 26 歳の時」を西暦「739 年」に当てる根拠は、タリアト碑文 E5 に「私の 28 歳の時に、蛇歳に」とあり、その蛇歳が西暦 741 年(辛巳)に比定されるからである。

**N5, yana ///:** 従来 yana の直後に読まれていた tüşdi は読み取れない。yana の後には 3 文字分のスペースしかなく、その後の i とあわせた 4 文字で tüşdi と復元するのは不可能である。

**N5, bilgä:** 冒頭の b は拓本への墨入れが下手で明瞭でないが、拓本の凹凸ではっきり見える。この Köi Bilgä Qayan は東ウイグル可汗国初代の闕毗伽可汗(懐仁可汗)すなわち骨力裴羅を指す。在位 744~747 年。

**N6, biña:** デルファーはこの単語を、従来の通説のような「千人隊」の意にとらず、「前衛部隊」の意味にとるべきであると主張する。その根拠のひとつとして、直前にある öñrä に着目し、これを通説のような「東に」ではなく「前方に・先に」と解釈し、özümün öñrä biña başi idti を「私自身を彼は前衛部隊長として先発させた」と解釈する(TMEN, IV, p. 86)。ベルタはこの説を取り上げて再検討する短い論文を発表した(Berta 1995)。その行論はやや乱れていて論旨を追いくいが、結局は従来通りの説に落ち着いている。

**N6, käyrädä öñdün:** öñdün は普通には「東に、東へ」の意であるが、ここではすぐ前にある öñrä「東方へ」との関係を考慮し、敢えて「ケイレに東から」と解釈しておきたい。あるいは öñrä を「前方へ」と解し、ここを「ケイレから東に」とすべきかもしれない。

**N6, yantačimda:** 破断部を挟んでいるために、ラムシュテットが yandač....da と読み(Ramstedt 1913, p. 15)、マロフが yantači と読み(PDPMK, p. 35)、その後もこのいずれかが踏襲されてきたところである。しかし原碑文を精査したところ、この次の文字は i ではあり得なかった。本稿はこれを Y nt č#(m)D a と復元・翻字し、yantačimda と転写する。すなわち動詞 yan-「戻る」の未来分

詞形に一人称単数の所有語尾と位格の格語尾が付いたものとみなし、それを「私が戻ってくるであろう(ような・はずの・べき)時に」と解釈するのである。それでうまく文脈はつながるし、文法的にも問題ないと思うが、ただ同時代の用例を未だ見出し得ていない。

**N7, [birlä]:** 拓本からは *birlä* と読むのは困難だが、文脈からはそうするしかないようである。しかし、1の文字はむしろ *nt* に見える。即ち // *nt a* と読める。そしてまた *nt* の前の文字には縦の一本棒が見えるので *s, i* などかもしれない。

**N8, qara qum ašmīš:** ラムシュテットは *ašmīš* を終止形とみたが (Ramstedt 1913, pp. 14-15), バザンは後ろの「三纛突厥の民」にかかる連体形とみる (Bazin 1982, p. 57)。文法的にはいずれも可能であるが、ここではバザン説に従う。「カラ=クム(黒沙砂漠)を越えた」ということが、漠北から漠南への移動、すなわちモンゴリア本土からゴビ砂漠を渡って内モンゴリアの大草原地帯に移ることを意味するととる点では、我々もバザンや谷憲の考え (Bazin 1982; 谷 1984) に賛成である。カラ=クムについては、欧米人がしばしば引用するチェグレーディの研究 (Czegeľédy 1962) 以前に、既に我国の岩佐の研究がある (岩佐 1936, pp. 106-119)。岩佐論文の当該箇所を一読すれば、カラ=クムが現在のフフホトの北方、陰山山脈地方を指していたことが判る。従って、740年代に入ってウイグル・バスマル・カルルクの三部連合のクーデターに遭って漠北の本拠地を追われた突厥が、そもそもの突厥復興(突厥第二可汗国発祥)の地である漠南に活路を求めた様子が理解できよう。

**N8, kōgār, kōmūr tay, yar ögüz:** この3つの地名を漠南の内モンゴリアに求めようとするバザンの考え (Bazin 1982) は納得できるが、実際のバザンの比定にはかなり無理や見落としがあり、賛成できない。例えば *kōmūr tay* 「炭山」を黄河北岸の「黒山」に比定するが、契丹勃興に関係あるそのものずばりの「炭山」について検討していない。具体的な地名比定は今後の課題である。

**N8, üç tuyluy # türük bodun:** 漢籍史料、例えば『資治通鑑』卷215, 玄宗本紀,

天寶元年条には、「上、遣使して烏蘇<sup>オズミシュ</sup>を諭し内附せしめんとするも、烏蘇は從わず。朔方節度使の王忠嗣は兵を磧口に盛んにし以て之を威<sup>おど</sup>せば、烏蘇は懼れて降らんことを請うも、而るに遷延して至らず。忠嗣は其の詐を知り、乃ち遣使して拔悉密<sup>バスマミル</sup>・回紇<sup>ウイグル</sup>・葛邏祿<sup>カルルク</sup>を説き之を攻めしむれば、烏蘇は遁去す。忠嗣は因て出兵し之を撃ち、其の右廂を取り以て歸る」とあり (p. 6855)、谷はシネウス碑文に現れるこの「三纛突厥の民」を、この史料その他に見える突厥の「右廂」部かと考えている (谷 1984, pp. 11-12)。

ところで、タリアト碑文 E7 にある平行表現によれば、この直後に *anta yetinč ay tört yegirmikä* 「そこにて 7 月 14 日に」という語句が続いている。この「7 月 14 日」については、740 年代初頭のウイグル関連漢籍史料を分析した片山章雄が<sup>8</sup>、742 年に繫年しており (片山 1984, pp. 28-29, 38)、また平行するシネウス碑文 N8 の冒頭部分 (*kögär ~ bodun*) の記事も 742 年の出来事とする (片山 1994, pp. 10, 13; cf. Bazin 1982, pp. 57, 60)。本稿もこれに従う。

**N9, *ozmiš tegin qan bolmiš*:** タリアト碑文 E9 の平行表現では、*bolmiš* の部分が *bolti* となっている。

**N9, *altinč # ay*:** ラムシュテットは *aŋ ilki ay* 「最初の月 = 正月」と読み (Ramstedt 1913, p. 15)、オルクン (ETY)・王静如 (1938)・マロフ (PDPMK)・アイダロフ (Айдаров 1971) のテキストでも全てこれに従っている。さらにこの箇所を部分的に引用した羽田 (1957, p. 185) およびバザン (SCMT, p. 224) もこの読みを積極的に支持している。しかし 2 つに割れている碑文の小断片 (上部断片) 末尾の *süŋüs* の後には 1 文字分、大断片 (下部断片) の上端の *ay* の前にも 1 文字分、両単語の間には合計で 2 文字分のスペースしかなく、*ŋ l k i* という 4 文字分を必要とする *aŋ ilki* が入る余地はない。*ay* 「月」の前に 2 文字くるだけで月名になるのは、*aram ay* 「正月」の *R m* か *altinč ay* 「6 月」の *lt nč* のいずれかの場合だけである。現地では碑石を精査したところ、小断片の末端には *lt* の右半分が残っているのが見えた。ラムシュテットの写真にはそれほどよく出ていないが、我々の撮影した写真ではかなり明白であるし、ピチュー

スの他のメンバーにも確認してもらった。It と R とは書き方によってはその右半分が酷似した形になり得るが、シネウス碑文ではそうではなく、かつまた古代トルコ語に *aram ay* が現れるのは、これまで知られている限りではもっと後代になってからである。従ってここは「6月」と復元するのが正しいであろう。

**N11:** 冒頭に2文字分のスペースがあるのは、石が硬くて文字が刻めなかったところらしい。テキストは連続している。

**N11, üč qarluq:** 川崎浩孝のシネウス・タリアト両碑文における関連記事の比較検討によって、この記事は、746年に行なわれたカルルク族の最初の西遷について記述されたものと論証されている(川崎 1993, pp. 95-98)。二度目の西遷記事については、W1の注を参照。

**N11, toquz [totoq]:** 旧版では、この部分に T の1文字しか判読できないにもかかわらず、タリアト碑文 S4にある同じく豚歳の記事を参考にして、*t[oquz tatar]* と推定復元していた(旧版, pp. 179, 192)。なるほど、タリアト碑文の当該箇所を振り返ってみると、シネフー以来、クリヤシュトルヌイ、テキンに至るまで一貫して「トクズ=タタル(九姓タタル)」を読んできた(Шинэхүү 1975, p. 90; Klyashtorny 1982, p. 343; Tekin 1983, p. 47)。しかし、1996年に採拓された最新の拓本を用いた片山の翻字では、当該箇所に前後する部分が // *ü č[Q R L uQ]:L G z N Y i L Q a:T uQ z T[T](R)/////* と読まれ(片山 1999, p. 169)、「タタル」の読みが完全なものではなく、補足されたものであった可能性が示唆された。そこでこの度、改めて阪大所蔵拓本を精査したところ、2点の発見があった。

第一に、上掲部分が刻されているタリアト碑文の第二断片、十二支獣による紀年表記 *layžin yilqa*「豚歳に」の直前に、D と i の残画を見出すことができた。すなわち、そこを // *ü č/(D i):L G z N Y i L Q a* と読み直した。これまで *ü č* が刻まれていることから、これに続けて *Q R L uQ* の4文字が推定復元され、*ü č qarluq*「三姓カルルク」が登場すると推測されてきた。しかし、我々が改めて読み直した翻字によれば、この部分には過去を表す三人称の終止

形語尾 (-di) を想定することができ、年代表記の直前で文章が完結していたとみなすことができたのである。

第二に、toquz に続く部分も新たに読み進めることができた。すなわち、我々は layzin yilqa 「豚歳に」の直後を、T(uQ)z T(W)[T](uQ W)[L](Y W)T uQ z B W Y R uQ # [b]i s s ŋ ü t:Q r a B W D N と翻字して、toquz totoq ulayu toquz buyruq beš säñüt qara bodun 「9人のトク(都督)に続き9人のブイルク(梅録)と5人の將軍と平民たち(が)」と解釈することができた。これまでは冒頭にトクズ=タタルが刻まれているものと想定されていたために、前後の文脈を通じさせることができなかった。しかし、この解釈によって、この部分全体を toquz totoq ulayu toquz buyruq beš säñüt qara bodun turuyin qañim qanqa ötünti と復元することができ (cf. 片山 1999, pp. 169, 173), 「9人の都督に続き9人の梅録と5人の將軍と平民は立ち上がって、私の父たるカン(骨力裴羅)に対して懇願した」という記事内容が明瞭となった。

ウイグル可汗国初期の状況を伝える漢籍史料には、「(ウイグルには)十一都督有り、本と九姓部落なり。一に藥羅葛ヤグラカルと曰う。即ち可汗の姓なり。二に胡咄葛と曰い、…(中略)…、九に奚耶勿と曰う。一部落毎に一都督なり。拔悉密を破りて、一部落を収め、葛邏祿を破りて、一部落を収め、各おの都督一人を置けば、統べて十一部落と號す。行止・鬪戰毎に、常に二客部落を以て軍鋒と爲す」とあり(『旧唐書』卷 195, 迴紇, p. 5198), ウイグルはもともと9部族から構成され、それぞれを都督が率いていたことがわかる。従って、タリアト碑文に言及された「9人の都督」とは、まさに漢籍が記録した「九姓部落」の部族長たる「都督」たちを指すことになる。ところでまた、上掲の史料には、ウイグルが、バスマルとカルルクを打倒した後、彼らの部族長をそれぞれ都督に任命したことによって、最終的に11人の都督を擁するに至ったと記されていた。川崎 1993によれば、カルルクは746年と754年の二度にわたり、アルタイ山脈以西に西遷したことが明確になっている(pp. 98, 108)。タリアト碑文の豚歳747年の記事で都督が11人ではなく9人と記述されているのは、

カルルク・バスミルがまだ完全にはウイグルのもとに併呑されていなかったからであろう。なるほど、本箇所が続くシネウス碑文の南面には、750年代初頭に繰り広げられたカルルク・バスミルとの抗争が記載されている。それ故、この時点のこの場面にカルルクが現れることはあり得ないのである。これらのことは、カルルクが746年にモンゴル中央部から駆逐されたものの、依然としてアルタイ山脈方面で勢力を保持していたという川崎の論証 (pp. 108-109) と合致する。

さて、以上のように本稿が読み直したタリアト碑文の S4 に続く S5 では、「ヤブグ(葉護)に彼が任命した」とあり(片山 1999, pp. 169, 173)、シネウス碑文 N12 の冒頭にもまったく同じ文言を見出すことができる。このシネウス碑文 N11 にはじまる豚歳のヤブグ授与は、第 1 章で述べたように、従来、N13 の存在が想定されていなかったため、バイルク部のタイ=ビルゲ都督に対するものと考えられてきた。しかし、今や N13 が発見されたことにより、ヤブグ号がタイ=ビルゲ都督に授与されていた可能性は完全に排除され、懐仁可汗こと骨力裴羅から息子の磨延啜に対して授与されていたのだと理解できるようになった。これによって、シネウス碑文 N12 の冒頭部分とタリアト碑文 S4-5 とは、磨延啜に対するヤブグ授与に関して平行する内容を持っていたことが初めて確定されたのである。その上で両碑文の内容に立ち返ると、可汗に次ぐ第二位の称号が碑文の主人公に授与されるという重要な場面にもかかわらず、唐突に異民族である「トクズ=タタル」が出現するという想定はやはり不自然と言えよう。ここは、前年(746年)にカルルクを駆逐してモンゴリアの主導権を確実にしたウイグルの骨力裴羅が、国家体制の整備のために息子である磨延啜をヤブグに任命していたと見る方がはるかに自然である。そうすれば、本稿が読み直したように、都督・梅録をはじめとするウイグルの構成部族長や高官・廷臣たち、さらには將軍や平民たちまでが登場することも首肯できよう。彼らは磨延啜へのヤブグ授与を「懇願」していたのである。

それ故、本稿はタリアト碑文における平行部分、すなわち豚歳(747年)の

記事の再読から判断して、シネウス碑文 N11 の toquz 以下に tatar「タタル」を推定復元する従来の見解を斥ける。その上で、toquz 以下には、ウイグル麾下の 9 人の都督と 9 人の梅録たちの懇願を受けた、磨延啜へのヤブグ授与にいたる経緯が記されていたものと結論する。

ところで、タリアト碑文 S4 行末から次行 S5 冒頭を見ると、äcü apa atı bar tedi と再建され、先行研究は「祖先の名前／名声」が取り沙汰されているとみなしてきたが(ex. Tekin 1983, p. 50; 片山 1999, p. 173), この at「名前／名声」が何を指すのかが問われることはなく、具体的に碑文の文脈を把握することができなかった。そこで、再度タリアト碑文の拓本で当該箇所を点検してみると、これに続く文字の欠損部分はわずかに 22 文字分ほどしかない。そして欠損部分の直後には anta yabyu atadı「そこでヤブグ(葉護)に彼が任命した」とあった。すなわち、この一文に先行するテキストにおいては磨延啜に対するヤブグ授与が話題になっている蓋然性がきわめて高く、äcü apa atı を「先祖の称号」と訳して具体的にそのヤブグの称号を指していると解釈すべきではないだろうか。

そもそもヤブグ(葉護)とは、エフタル語に起源するという見解(ED, p. 873b)もあるように、中央ユーラシアの遊牧国家が採用し続けてきた重要な称号である。西突厥では、その最盛期を築いた統葉護可汗の称号要素のなかに現れている。また、東突厥・第二可汗国では、しばしば右翼長たる šad シャド(殺, 察, 設)に対する左翼長の称号として授与されていた(cf. 護 1967, pp. 37-38)。そしてウイグルについては、『新唐書』巻 217 上、回鶻上に、「<sup>た</sup>曾たま突厥亂るに、天寶初、(骨力)裴羅は葛邏祿と自ら左右葉護を稱し、拔悉蜜を助けて(突厥の)烏蘇可汗を撃走せしむ」とあり(p. 6114), 742 年、バスミル可汗のもとでカルルクの首長とともに骨力裴羅が葉護を自称していたという。本稿の N4, türük qayan čaq の注で述べたように、突厥・ウイグル両者を包含するトルコ民族史を描こうとする意識が、シネウス・タリアト両碑文の背景にあり、碑文の文脈上「祖先」が指す範囲は単にウイグル族だけでなく先行する突厥可汗国も含まれていたと考えられる。以上のことから、磨延啜に与えられた

ヤブグとは、当時のトルコ系遊牧民にとって由緒ある称号であったとみなすことができる。従って、本稿は、タリアト碑文 S5 冒頭の当該箇所を「先祖(代々)の称号がある、と彼(ら)は言った」と訳出して、具体的に磨延啜に与えられたヤブグ号のことが話題になっていたと解釈したい。

ここまでシネウス碑文 N11 とそれに平行するタリアト碑文 S4-5 の文脈を検討してきたように、ウイグル可汗国の初期段階においては、ウイグル族自体の主導権は決して絶対的なものではなかったことがわかる。突厥可汗やバasmil・カルルク族を打倒して可汗を称し得たといっても、骨力裴羅が息子をヤブグに指名する際には、可汗国を構成する 9 人の部族長(都督)たちの賛同を必要としていたのである。これは、ウイグル可汗の政権はあくまでトクズ=オグズ(九姓鉄勒)という 9 部族の連合体制を基盤にしていたのであり(山田 1989, pp. 143-144)、かつ彼らによる推戴王権の性格が非常に強かったことを物語っている。このウイグルの主導権は、可汗の代替わり、すなわち骨力裴羅が没して磨延啜が可汗に即位した際に大きな動揺にさらされたと考えられる。というのは、シネウス碑文の東面には、ウイグルに対する反乱ともみなされるべきセキズ=オグズ(八姓オグズ)との戦闘の記録が残されているからである。これについては、E1 の *säkiz oyuz* の注を参照されたい。

**N12:** 行頭を示すラインは、先に彫られたタムガのヒゲが延びてきているため、他の行より少しだけ下がっている。さらに 3 文字分のスペースがあるのは、石が硬くて彫れなかったところらしい。テキストとしては連続している。

**N12, yabyu atadi:** 拓本にはよく出なかったが、ピチエースの複数のメンバーが実際に碑石を見て確認した。

**N12, küsgü yilqa:** ラムシュテット (Ramstedt 1913, pp. 16-17) 以来、誤解されてきた部分であるが、片山章雄らの研究グループが正しい読み気付、それを 1994 年に発表した(片山 1994, p. 12)。ラムシュテットのテキストでは文字にかなり欠損があるように思われるが、片山が指摘したように、実際にはラムシュテット自身が付載したシネウス碑文の写真からも、文字はほぼ完全に読み

とれるのである。もちろん、我々はこの点を現地でも確認したのであり、疑問の余地は全くない。

**N12, tay bilgä totoq:** tay bilgä の部分は拓本にはよく出なかったが、ピチュースの複数のメンバーが実際に現地で確認した。この tay bilgä totoq は E5 にも現れ、両者が同一人物であり、九姓オグズ(九姓鉄勒)を構成するバイルク／バヤルク(拔曳固／拔野固)部の「大毗伽都督」として漢籍に見えていることを発見したのは王静如である(王静如 1938, p. 14; cf. 小野川 1943, p. 361)。実際に『冊府元龜』巻 975, 外臣部, 褒異第二には、「[天寶八載(749)]十月丁卯, 九姓勃曳固の大毗伽都督默每等十人來朝すれば, 並な特進を授け, 錦袍金鈿帶魚袋七事を賜う。蕃に還る<sup>かえ</sup>を放す<sup>ゆる</sup>」という朝貢記事があり(p. 3881), 彼の名を確認できる。なお, カマロフは, このバイルク部の大毗伽都督がウイグルに破れた結果, 唐に投降したために朝貢記事に記録されたと考えている(Kamalov 2003, p. 84)。しかし朝貢後に「蕃に還るを放す」とあり, 体よく本国帰還を命じられているから, その後どうなったのかは知る由もない。

**N12-13:** ここに新たに 13 行目を設定した経緯は, 第 1 章で述べた通りである。鼠歳(748 年)の紀年があるタリアト碑文 S5, それに続く W1 との比較により, 本箇所 N12 に磨延啜の可汗即位記事があったことは, ほぼ間違いない。そして「牛歳(749 年)に」という語が N12 ないし N13 のどちらかにあったことも疑いないが, とりあえずは N13 にあったと推定しておく。

**E1, ücüně ay bir yañıqa:** 日付としての ücüně ay「3 月」と, bir yañıqa「1 日に」とは新しく読めた部分である。ラムシュテット以来誰もこう読んでいないが, 文字の残画と, すぐ後に eki yañıqa「2 日に」が現れる文脈とから, まず間違いない。

**E1, kün [artañılmıš?] tün öcürilmıš:** ここはラムシュテット以来の読みと全く異なる(cf. Ramstedt 1913, p. 17)。kün「日中, 昼」と tün「夜, 夜中」の読みはほぼ確実であり, かつ前後には単純な過去ないし完了の終止形がきている文脈

で、-mis を伝聞過去とみなすのは、どうにもすわりが悪い。むしろこれを地名ビュケグックにかかる完了の連体形とみなすべきと考え、残画と矛盾しない語を探した上で推測したものである。

**E1, säkiz oyuz:** この「セキズ=オグズ(八姓オグズ)」が、漢籍に類出する九姓鉄勒、すなわち古代トルコ語碑文に現れるトクズ=オグズ(九姓オグズ)とは全く別の集団であるのか、それとも九姓オグズよりウイグル部を除いたものを八姓オグズと呼んだのかという問題は、これまで結論が出ていなかった。しかし本碑文の北面末尾から東面冒頭で、ウイグルが戦っている敵は八姓オグズと九姓タルであり、本稿で新たに復元した N13 の文脈からすれば、八姓オグズの中にバイルク部長のタイ=ビルゲ都督がいたことはほぼ疑いない。そう考えれば、東面前半に 749 年のウイグル帝国の大混乱が叙述され、その原因の一つとして E5 に「タイ=ビルゲ都督の卑劣さのゆえに」と記されていることと符合する。一方、バイルクは九姓鉄勒の重要な構成部族であったことは明らかなのであるから、必然的に八姓オグズは九姓オグズに含まれていたことになる。漢籍には「八姓鉄勒」という呼称は一度も在証されないから、八姓オグズとは、九姓オグズの筆頭部族であると意識していたウイグルが、自己以外の 8 部族を呼んだものと考えべきであろう。N12 に記されているとおり、磨延啜は父である初代可汗の死去直前によくヤブグに任命されたのであるから、恐らく彼の可汗即位によってウイグル部が引き続き九姓オグズのリーダーになることを素直に認めなかった 8 部族が、ウイグルに反旗を翻したために、このような大規模の内乱が勃発したのではなからうか。

**E1, kün turyuru:** OTWF, p. 730 でエルダルはこの表現を “throughout the day” と解すべきであると主張するが、前後の文脈はやはり従来の解釈を支持すると思う。

**E1-2, qulum küñüm bodunuy täñri yer ayu berti:** ほぼ同様の表現が S9 にも現れる。直訳すれば「私の奴婢は民を天地が言ってくださった」であるが、文脈からこの部分が天地の神の言葉であることは疑いない。täñri が「天神」で

あることにも問題はないが、yer「土地、大地」が単独で「地神」を意味しているとなす点には註釈が必要である。それには突厥第二可汗国時代のキョル=テギン碑文・東面第 10-11 行目に *üzä türük täñrisi türük iđuq yeri suvı anča temiş* 「上方でテュルクの天神、テュルクの神聖な地水が次のように言ったという」とある表現が根拠となる (cf. 小野川 1943, p. 291; GOT, pp. 233, 265)。ここに見える yer suv「地水」が人格神であることは明らかである。元来、中央ユーラシア東部の乾燥地帯に住んでいた古代トルコ民族やモンゴル民族の間では一般に人々の生活に有用な「土地」を指し示すために「地」と「水」を組み合わせた「地水」という表現を使う。シネウス碑文のこの箇所の yer を yer suv の同義語ないし短縮形とみなせば、yer 単独で「地神」と解釈することは許されるのである。そこで本稿は、bodun「民」に接続する対格 -γ を間接話法の主語を示すもの、さらに「私の奴婢」と「民」とが倒置されているとみなし、「(そもそもトルコの全) 人民は私(ウイグル可汗)の奴婢である」と、天神と地神が仰せになってくださったものと解釈した。

ところで、古代トルコ語碑文研究において、可汗と天神の関わりについては以前より言及されてきたが、可汗と地神(yer)の関わりについては史料も乏しくあまり検討されてこなかった。遊牧民にとって雨を降らせる天と牧草を育む大地とは、生活の根幹を保証するものである。万民を統べる可汗にとって、その天地を司る天神・地神両方からのクト *qut*「恩寵」があってこそ、民を養って支配することができる。この点で参考になるのが、西方ユーラシア草原で可汗と王が並立する二重王権体制をとっていたハザルの例である。10 世紀の地理学者マスウディー(al-Mas'ūdī)は次のように伝えている。「ハザルの土地が旱魃に遭ったり、災害が彼らの国を苦しめたり、彼ら以外の人々に対する戦いが彼ら(自身)に矛先を変えたり、予期せぬことが起こると、一般人と高官たちはハザルの王のところへ駆け込み、そして(以下のように)言うのである。『我々はこの可汗にすでに悪い兆しを見て、彼の運命に悪い兆しを得たのである。彼を殺せ。あるいは彼を我々に引き渡せ。彼を我々が殺すから』」(Pellat 1962,

p. 163). このようにハザル民族のあいだでは、災害・戦禍などは可汗の責任と考えられていた。そこで旱魃が挙げられていたのは、可汗が地神(yer)からのクトを失ったと考えられたのではなからうか。

**E3, yaŋıqa:** 旧版では文脈から [otuz]qa と読む可能性も残しておいたが、今回、大阪大学に将来した2セットの拓本を改めて精査した結果、yaŋıqaであると確定できた。

**E3, qızın qoduzın:** Bazin & Hamilton 1979 を参照。

**E4, körä:** ED, p. 957a の指摘どおり、yürä は körä の誤りだったことを現地で確認した。

**E4, ayyučı:** これは現地では読めなかったが、2セットの拓本を照合して新たに読めた部分である。アイグチは「顧問官・大臣」であり、突厥のトニユクク碑文(第10, 29, 49, 50行目)では可汗を補佐する立場にあった有名な武人宰相トニユクク自身を指しているが、ここでは誰を指すのか即座には分からない。しかしながら、ウイグルの磨延曷時代にもアイグチがいたという事実は、大きな発見であり、今後の研究に貢献するであろう。

**E4, čäriqlädi:** ラムシュテットは č r[ɡ]#i t]d i (čäriɡ itdi) と読んだが(Ramstedt 1913, pp. 18-19), 大断片の上端の d の前には1文字分のスペースしかなく、しかもその文字は t ではなく、1 か ɣ のいずれかである。そこで本稿では、čäriɡ を動詞化した čäriqlä- と読んでおきたい。この語は古代トルコ語にはいまだ在証されていないが、チャガタイ語には「軍隊を導く」という意味で在証されている(cf. VWTD III, pp. 1967-1968)。ここでは仮に「軍隊を展開する」と解釈しておいた。

**E4, yazı qiltım:** 「私は平定した」と訳したのは、yazı を yası と同じとみなしたからである(cf. ED, p. 984b: 'and scatterd them (?)').

**E5, tay bilgä totoq:** N12, tay bilgä totoq の項を参照。

**E6, yayın:** ベルタはこれを yayı の Comitative (共格・随格)とみなして「敵と共にその首領が進軍してきた」と訳している(Berta 1995, p. 10)。本稿もそれに

従う。この Comitative は普通には具格に含まれるものである (cf. GOT, p. 137).

**E6, qatī:** クローソンはこの qat- を (1) “to mix; to add to” ではなく (2) “to be hard, firm, tough” で解釈するが (ED, pp. 594-595), 逆であろう。因みにバザンはここを「私はさらにタタル族と衝突した」と訳している (SCMT, p. 226).

**E7, /-qja(?):** ラムシュテットは語注において “zu den Kitänen?” としており, qītañqa という再建形を推定しているようである (Ramstedt 1913, p. 52). 一方, チェグレーディは元来ここに qarluqa が彫られていたと考えている (Czeplédy 1973, p. 265). 5 文字程度の欠落の後に a が判読でき, kirti「彼(ら)は竄入した」が続くことから, 本箇所には何らかの集団名あるいは地名に与格 (-kā/qa) が付属した語末形を予想できる。しかし, 現時点では a の 1 文字しか翻字できないため, 判断を保留した。

**E7, irin:** ir は yir / yir と同じ語で, 「北」を意味する (cf. ED, p. 954b).

**E7, bošunildim:** ED, p. 383a の bošun- の項では bošunladim と読んでいるが, 従えない。

**E7, yabyu šad at, tarduš tōlis bodun:** テス碑文 W6 には, oyli tarduš yabyu tōlis čad olurti「彼の息子(たち)はタルドゥシュ=ヤブグとテリス=チャドに就任した」とある。大澤孝は, テス碑文の建造が 750 年にかかるという見解から (本稿 E8, ötükan kedin učinta の注を参照), このテス碑文の記述が, シネウス碑文の本箇所における, 磨延礫によるヤブグ・シャド任命記事に対応すると考えており (大澤 1999, pp. 159, 161, 163), 本稿もその見解に従う。

ところで, 軍政一致の遊牧国家のひとつである突厥において, タルドゥシュとは古代トルコ語で右翼すなわち西方の区画を, テリスとは左翼, 東方の区画を指す (小野川 1943, pp. 350-351)。そして, ヤブグとシャドとは, その左右翼の長にそれぞれ授けられた称号であった (護 1967, pp. 37-38)。具体的に例をあげれば, 突厥第二可汗国の勃興期, 骨咄<sup>クトルグ</sup>禄こと初代エルテリシュ可汗 (在位 682 頃 ~ 691 年) の即位を伝える漢籍には, 「(骨咄<sup>クトルグ</sup>禄は) 又<sup>ま</sup>た九姓 (鉄勒) を抄掠して, 羊馬を得ること甚だ多く, 漸<sup>いよ</sup>いよ強盛に至れば, 乃<sup>すなわ</sup>ち自ら立ちて可

汗と爲る。其の弟の黙啜を以て殺と爲し、咄悉訶もて葉護と爲す」とある（『旧唐書』卷 194 上、突厥上、p. 5167）。これに対応する突厥第二可汗国のビルゲ=カガン碑文・東面第 12 行目 [cf. キョル=テギン碑文・東面第 13-14 行目] には、tölis tarduš bodunuy anta etmiş yabγuy šadıγ anta bermiş「彼（骨咄祿）はテリスとタルドゥシュの民を組織した。彼はヤブグとシャドの称号を（彼らに）与えた」と記載されている（cf. 小野川 1943, p. 292; GOT, pp. 233, 265）。このように、突厥第二可汗国の建国期には、

左翼（東）—— テリス            —— ヤブグ

右翼（西）—— タルドゥシュ —— シャド

という対応関係が確認できる。これに対して、シネウス碑文の本箇所 E7 とテス碑文 W6 の記載によれば、東ウイグル可汗国の建国期には、

左翼（東）—— テリス            —— シャド（チャド）

右翼（西）—— タルドゥシュ —— ヤブグ

という対応関係を看取できたのであった。つまり、時代を前後して成立した同じ古代トルコ系遊牧国家でありながら、突厥第二可汗国と東ウイグル可汗国は、それぞれ建国期の左右翼体制に着目してみると、左右翼長の帯びている称号が逆転しているという興味深い現象を観察できるのである。

なお、シネウス碑文の本箇所ウイグルの右翼長に任命されたヤブグとは、後にウイグルが安史の乱に介入した際の至徳二(757)年九月以来、磨延啜から唐本土の肅宗のもとに派遣された彼の長子「太子葉護」のことであろう（cf. 『旧唐書』卷 195、迴紇、p. 5198; 『新唐書』卷 217 上、回鶻上、p. 6115）。ただし、彼は磨延啜が亡くなった 759 年の時点では、すでに罪を得て処刑されており、第 3 代の牟羽可汗 (Bögü Qayan) として即位したのは、磨延啜の次子(末子)の移地建であった（cf. 『旧唐書』卷 195、迴紇、p. 5201; 『新唐書』卷 217 上、回鶻上、p. 6117）。この移地建が、本箇所において、磨延啜から左翼長として任命されたテリス=シャドであったことは十分に予想できよう。

**E8, ol ay:** ラムシュテットは ol yıl と推定しているが<sup>8</sup> (Ramstedt 1913, pp. 23,

53), ここの文字列からは, ol ay の読みも ol yil の読みもどちらも可能である.

**E8, ötükän kedin uçinta:** タリアト碑文 W1 には, ötükän kedin uçinta tez başinta 「オテュケン(山)の西の端, テズの河源地帯で」という部分があり, これは 750 年に碑文を作成した場所を示唆する部分である. 次注で示すように, 本碑文でもこの箇所の直後には同じく「テズの河源地帯で」が刻まれており, 続く碑文作成・夏営の記事もタリアト碑文に対応していると思われる. このような観点から改めて両碑文の阪大拓本を精査した結果, ここに「オテュケン(山)の西の端」と再建するために十分な数文字を確認することができた. なお, 大澤はこの記事をテス碑文作成記事と考えている (大澤 1999, pp. 166-167).

**E8, tez başinta:** バザン教授は, 1981 年 3 月 17 日付けの森安への個人的書簡の中で, ラムシュテットが… z başi anta としか判読できなかったこの箇所を tez başinta と復元し, この場所をテス碑文のテスに比定する考えを示された. 我々は現地で (ti z 即ち Tez と読めることを確認した. S2, tez başi も参照せよ.

**E8, qasar qurüdün:** クローソンは, ラムシュテットが aqsıraq ordu と読んだのを退け, ラムシュテットが注で示唆した別解を少しだけ修正してこのように読んでいる (ED, pp. 95b, 645a; cf. Klyashtorny 1982, p. 340; Ramstedt 1913, pp. 23, 53). この Qasar が杜環『経行記』の記事 (『太平寰宇記』卷 184, 大秦国, p. 3516) に見える「可薩突厥」, あるいは『新唐書』卷 221 下, 波斯国 (p. 6258) に記載される「突厥可薩部」であるはずはないが, タリアト碑文 E2 の atlıyın tökä barmış qadır qasar äbdi bärzil, テス碑文 N3-4 の atlıyın tökä barmış … äbdi bärzil qadır qasar と比較して, 別の集団名であった可能性は高いと考えられる. なお, 大澤によるテス碑文の訳注 S2, tezig qasar qurıy qontı の項を参照 (大澤 1999, pp. 166-167).

**E8, çit:** タリアト碑文の W2 には, ウイグル第 2 代可汗の磨延啜が örgin 「玉座」と çit とを立てたとある. 玉座は, タリアト遺蹟に現存する円形のマウンド(半径 18~19 m, 高さ約 1.5 m)の上に豪華なテント(帳幕)が建てられ, その中に置かれたと考えれば納得がいく. 一方, これまで「フェンス, 柵, 垣

根、塀、囲い、縁、へり、境界」などと解釈されている *çit* が、土塁・土塀・レンガ積み・石垣のように後世に残るものでなかったことも、タリアト遺蹟の状況から知ることができる。おそらくこれは木の柵であったと思われる。一般にハンガイ地方の山の北斜面の頂上付近には針葉樹林がしばしば見られるが、タリアト地方も例外ではなく、遺蹟東南の近い山の北斜面には豊かな針葉樹林がある。木材の貴重なモンゴル草原であっても、ここでは *çit* を木材で作ることに何ら問題はなかったであろう。1996年8月28日の現地調査記録を参照(森安／オチル 1999, pp. 166-167)。

**E9, [ulu] yilqa:** Tekin 1983, p. 45 は、龍歳 (752 年) に磨延啜が彼の碑文を *bunta* 「ここで」作らせたと記すタリアト碑文 W2-3 を検討した際、そこにシネウス碑文 E9-10 に対応する同内容の平行表現を見出したことから、紀年が欠落しているシネウス碑文の当該箇所も龍年の記事であろうと予測していた。今回、拓本の精査によって、その平行表現で記述された記事の直前に、新たに *yilqa* を読むことができた。何歳かを示す十二支の部分はまったく判読することができなかったが、上述のように、タリアト碑文そのものが建立された龍歳の夏営が話題になっているのであるから、*yilqa* の直前には元来 *WLW*, つまり *ulu* 「龍」が刻まれ、龍歳の紀年があったことは間違いない。

**E9, // // // baš //:** ラムシュテットの推測では *ö[tükän yiš ba]ši an[ta]* であるが (Ramstedt 1913, p. 23), 我々にはそうは読めなかった。

**E10, toqïtdim:** ラムシュテットが *TW[uQ z]W [G z]* (= *Toquz Oquz*) と推定し (Ramstedt 1913, p. 23), 旧版では *TW...//* として敢えて読まずにおいたこの部分を、今回我々は *TW(uQ i T)[D m]* と復原することができた。直前には碑文を *yaratïdim* 「私は作らせた」とあるから、それに連続するこの部分では碑文を *toqïtdim* 「私が打ち立てさせた」となる文脈はきわめて自然である。

**E10, ürünj bägig qara qulluquy:** この箇所はラムシュテットも推定復元しているところであるが (Ramstedt 1913, p. 23), 本稿もほぼこれと同じように読むことができた。ただし大きく違うのは、ラムシュテットが *BWL uQ G (buluquy)*

と推定したところを、新たに [Q] W L uQ G 即ち qulluquy と読み、全体を「白い(高貴な)ベグ」と「黒い(卑しい)奴隷」という対立する集団概念の組み合わせと解釈する点である。

「ベグ」ないし「貴族」という支配者集団と、「平民」ないし「奴隷」という被支配者集団とが対立概念として組み合わせられて表現されることは内陸アジアの遊牧社会では珍しくないし、さらに両者を白と黒の対立で象徴することもモンゴル遊牧民でよく知られた事実である。古代トルコ民族においては、西方ユーラシア草原のハザル人の事例がある。すなわち 10 世紀に書かれたイスタフリーの地理書は、ハザル人が「浅黒い」人々と「白い」人々から成っていると記述している (al-Iṣṭakhrī, p. 223)。ゴールデンはこの記事を遠方のイスラーム世界への誤った情報の伝達とみなした上で、この区別は身体的差異の謂いではなく、支配・被支配の関係にある二つの政治的集団の表徴であると解釈している (Golden 1980, p. 142)。このような例を考慮すれば、シネウス碑文と時代的に近いキルギスのイェニセイ銘文に見える *ürünjüm qaram* 「私の白いものと私の黒いもの」という表現に対し、マロフやクローソンは、これを「家畜」とみなしているが (cf. Малов 1952, pp. 30, 81-82; ED, pp. 643b-644a), その解釈にも変更をせまることになろう。

**E10, anī <üzä> olurmīš:** anī olurmīš のままでは文意を通じさせることができないので、恐らく両語の間に *üzä* が彫り忘れられたのであろうと推測する。ところで、E10 から S1 にかけての文脈からは、カルルクとキルギスとが同盟を結ぼうとしていたことがうかがわれる。当時、チク族を出勤させられる状況にあるのは地理的条件を考慮してもキルギスに間違いないので、ここで「白いベグと黒い奴隷」の上に君臨しつつキルギスに人を派遣したのは、カルルク側と考えられる。なお、カルルクの君長は、バスミル・ウイグルと共に突厥第二可汗国を滅ぼしてヤブグ(葉護)の称号を自称するようになった 740 年代前半以降、一貫してこのヤブグ号を保持していたはずであるから (羽田 1957, p. 183; 佐口/山田/護 1972, pp. 373, 443; 川崎 1993, p. 97), 本稿ではそれを踏まえて、

この部分の主語をカルルクのヤブグと想定した。

**E10, män:** män も bän も一人称単数主格の代名詞であるが、ここでは bän と記されていないことに注意されたい。E12 & S9 にも属格で mänij と表記されている。一方、より古い形の bän は、本碑文の E4, S4 (2 times), S6, Extra-b, Extra-c (2 times) で使われている。突厥碑文では、トニユクク碑文とキュリ=チオル碑文には bän のみが、キョル=テギン碑文とビルゲ可汗碑文に män のみが現れるのに、ウイグル初期のシネウス碑文に両者が並出するのは興味深い現象である。ちなみにラムシュテットは N1 にも bän を読み取るが (Ramstedt 1913, p. 13), 当該箇所に残っているのは文字 b のみであり、また文脈からも確実とはいえないので、我々は採らなかった。

**E11, totoq bašin:** ベルタと同じく -in を Comitative (共格・随格) とみなすが、baš については人名構成要素ではなく普通名詞「隊長・頭」とみて、「トトク(都督)を隊長として；トトク(都督)を先頭に」と解釈する。

**E12, yälmäsin:** ベルタはこの行に 2 回見える yälmäsin について、前者を従来通りに対格とみなしながら、後者を Comitative (共格・随格) とみなし、「その(キルギスの)偵察隊と共に私の部下(ウイグル軍人)をそこで急襲し、情報提供者となし、(私の部下を捕虜として)彼ら(キルギス)のカンに向けて[連れていった]」と解釈する (cf. Berta 1995, p. 10, n. 5)。恐らくそれは、本文が伝聞過去形 -miš で終わっているので、「私の部下」が主語ではおかしいと考え、それを目的語と解釈したいがためであろう。しかしこの解釈には従いがたい。

**E12, basmiš:** この -miš の表記法は、テキンのいう母音調和の例外法則 (GOT, pp. 59-62) に外れている。本碑文でもほとんどの場合はその例外法則に従って、後舌語であっても前舌系の m s で表記されるが、ここを含め 5 回 (S5 & S7, barmiš; S8, qatılmış; Extra-a, bamiš) だけ m š と表記される。

**S1, tošinta:** TTT, V, p. 335, note A.23 に引用された仏教文献 TID 200 (Mainz 774) に見える toš を「池, 沼」とする解釈に、クローソンもツイーメも従っている

(ED, pp. 557-558; Zieme 1981, p. 242). クローソンはまた「氷、氷水」との関連も考えているので、碑文がいうところのエルティシュ河、すなわちイルティシュ河の河源となる永久凍土の溶けだしたような高原の沼地をいうのかもしれない。いずれにせよウイグル軍が通過したのは沼地地帯であったと考えられる。

ところで、S1 ではウイグル軍がイルティシュ河を越えることになるのだが、従来、これは漠然とカラ=イルティシュ河に比定されてきた (cf. 川崎 1993, p. 105). しかし、カラ=イルティシュ河はイルティシュ河上流の総称であり、多くの支流をかかえている。そこで、イルティシュ河とともに越えたというアルカルの河源地帯の候補となるべき支流を探してみると、東から西へ狭義のカラ=イルティシュ河、クラン (Kran 克蘭) 河、アラガク (Alagak 阿拉哈克) 河、ボルチュン (Burchun 布尔津) 河、カバ (Kaba 哈巴) 河などを挙げるができる。そのうちアラガク河畔にのみ阿拉哈克湖などの湖沼地帯が存在し、科克蘇湿地自然保護区も設定されている。ウイグル軍が沼地を越えたことを考え、アルカルはアラガク河に当てておく。

**S1, är qamiš altin yanta //// kăčdim:** ここは är qamiš を地名とみるラムシュテットよりも (Ramstedt 1913, p. 25), むしろそれを「男たち、兵士たち」並びに「葦」の意味にとるクローソンの考え (ED, p. 131a) に近いが、それでも全体の解釈はかなり異なる。ところで、なぜ水辺を渡る際に葦が現れるかという点に関して、『魏書』巻1, 序紀・昭成帝には「[建國] 三十 (367) 年冬十月, 帝 (昭成帝/什翼犍) は衛辰 (匈奴の首領) を征つ。時に河の氷, 未だ成らざれば, 帝は乃ち葦の緇 (荒縄) を以て漸 (流水) を約しずぶに, 俄然として氷合するも, 猶お未だ堅まること能はざれば, 乃ち葦を上にに散らす。氷草は相い結びたれば, 浮橋の如し」とある (p. 15)。この記事は鮮卑拓跋氏の北魏がまだ代を名乗り, 陰山南方の盛楽に都を置いていた頃のもので, 昭成帝が匈奴討伐の際, まだ凍結しきらずに流水が流れる黄河に葦の荒縄を投げ入れ, 河を凍結させて渡ったという記事である。この記事で用いられた葦の荒縄は, 現地の河辺で調達され, 即席で縄に編まれたものと思われる。つまり, 鮮卑族は河辺にあるも

のを利用して、騎馬のまま河を渡る知恵を身につけていたのである。昭成帝の時代はシネウス碑文の成立から約 400 年遡るとはいえ、こうした知恵が遊牧民に共通したものだだった可能性は高い。toš が池や沼であれば葦で舟を造ったということになり、永久凍土の沼地であれば葦を敷き詰めたことになるが、いずれにしろウイグル軍は、イルティシユ河の河畔に生えていた葦を即席に利用して、騎馬のまま水辺を越えていったものと思われる。

**Sl, bolču:** ここに bolču という推定復元をしたのは、ラムシュテットに従ったからである (Ramstedt 1913, pp. 24-25, 56)。トニユクク碑文第 35 行目 (cf. 小野川 1943, p. 327; GOT, pp. 251, 288), キョル=テギン碑文・東面第 37 行目 (cf. 小野川 1943, p. 300; GOT, pp. 236, 269), ビルゲ可汗碑文・東面第 28 行目 (cf. 小野川 1943, p. 303; GOT, pp. 243, 276) では河川名ではなく、単独の地名として記載されている。いずれも突厥軍がアルタイ山脈を越えて、イルティシユ河を渡って西突厥(十姓<sup>オン=オク</sup>/十箭<sup>テュルギシュ</sup>)の後継勢力である突騎施を攻撃したという同一の事件を記録した箇所に見える。

この突騎施攻撃は岩佐とクリヤシュトルヌイによると、711 年に行なわれたという (岩佐 1936, p. 198; Кляшторный 1964, pp. 140-141)。内藤みどりはトニユクク碑文の記述に現れるイルティシユ河をカラ=イルティシユ河と見なしたうえで、この Bolču がウルングル(Ulungur 烏倫古)湖付近ではないかと推測している (内藤 1988, p. 250, 注 81)。一方、岑仲勉は『西域水道記』に記録されたイルティシユ河の支流である博喇濟河(現在の Burchun 河)を、音の類似から諸碑文に記載のある Bolču に当たる可能性を示している (岑仲勉 1958, p. 875)。また、芮伝明は岑仲勉とは別に検討を行なったが、彼と同じ結論に達している (芮伝明 1998, pp. 105-108)。川崎は現在の Burchun 河が本碑文の Bolču にあたるかどうか定かではないと述べている (川崎 1993, p. 106, 注 34)。

ところで、現在の地形図によれば、Burchun 河は、前々注で挙げたアラガク河の西に所在し、アラガク河とほぼ平行してイルティシユ河に流れ込み、アラガク河との最短距離は約 30 km である。ウイグル軍は東から西へ進軍したの

であり、碑文の記載通り、アルカルの河源地帯を越えた後に Bolču (河) に到着したことは間違いがない。そこで、前々注で述べたように、アルカルの河源地帯をアラガク河の上流域と考えることができれば、ウイグル軍はアルカルを越えた後に現在の Burchun 河を通過することになる。碑文の Bolču が Burchun 河であるという岑仲勉の推測も補強されるであろう。

**S2, tez baši:** ラムシュテットが t s z と判読していた語は (Ramstedt 1913, p. 26), 正しくは t i z である。周知のように s と i とはよく似ていて、保存状態の悪い碑文面では判別がきわめて困難である。E8 とその注を参照せよ。

**S2, čitimin yayladim:** čitimin の -n は前舌である。後舌語に一人称語尾と前舌の +n が付いているのであるから、テキン文法書の法則 (GOT, p. 59; cf. Кононов 1980, p. 159) に従うなら、この +n は具格 (ないし共格・随格) ではなく対格と考えねばならない。後続の動詞 yayla-「夏営する」は普通は自動詞であるが、ここでは敢えて「~を夏営地とする」と他動詞的に解釈しておきたい。

**S2, at ber-:** ラムシュテットの翻字では T の 1 文字を抜かしている。従って転写もしていない。その後の諸家もそれに追従するが、間違いなく T 字が存在するので、at と読むべきである。OTWF, p. 78 では at を読まず単独で ber- のみを対象としているので “supply” と英訳しているが、正しくは at ber- なので “nominate” と訳さねばならない。

**S2, išbaras tarqat:** išbaras は突厥の称号 išbara イシュバラの、また tarqat は tarqan タルカン (達干, 達官) のそれぞれ複数形である。これらの複数語尾である -s と -t については、GOT, p. 122; GOT H, p. 158 を参照。ところで、漢籍に「始波羅」や「沙鉢略」などと音写されるイシュバラについては、当初、ペリオが突厥碑文での再建形を (i)šbara であると提案し、非トルコ語の原形として \*(i)špara を推定した (Pelliot 1929, pp. 210-211)。その原語についての説明はないが、ペリオは『通典』巻 197、突厥上の官称号記事で「始波羅」に「勇健者」という訳語が与えられている (p. 5402) ことを指摘する。我が国では、小野川秀美・山田信夫がペリオ説を採用している (小野川 1943, pp. 299, 367; 佐口／

山田／護 1972, pp. 43-44). しかしながら、アールトは、この称号がサンスクリット語 *īśvara* からの借用であることを指摘しており (Aalto 1946, pp. 127-133), クローソンもそれに従い, “lord, prince” という訳語で採用している (ED, p. 257a). イシュバラが借用語であった点は間違いのないであろう. ただしインドのバラモン教・ヒンドゥー教では, *īśvara* は世界を創造した最高神である「自在天」を指し, 多くの場合シヴァ神の別名となる.

**S3, *kälir*:** 新たに読めた部分である.

**S3, *tayyan köl*:** モンゴル国の南西部に所在するゴビアルタイ<sup>アイマク</sup> 県<sup>ソム</sup> デルゲル郡には, 現在, タイガン湖 (Тайган нуур) という名の湖がある (北緯 46 度 22 分 10 秒, 東経 97 度 23 分 39 秒). その湖は, ハンガイ山脈の南斜面に形成されたものであり, ハンガイ山脈とアルタイ山脈の間に位置している. 碑文の本箇所は, 既にアルタイ山脈の西麓方面に逃れて行ったバスマル族・カルルク族に対する前哨戦の場面であるから, ハンガイ山脈方面から彼らを追走するウイグルの磨延啜が, 現在のゴビ=アルタイ方面に所在する, この湖の周辺で軍勢を展開していたことは十分に考え得る.

**S3, *äv edgüči*:** もともとラムシュテットは *bidgüči* と読み “leichte Truppen” とする解釈を提案していたが (Ramstedt 1913, p. 57), ミュラーはそれを退け, 「書記」という方向での解釈を示唆した (Müller 1915, p. 33, n. 2). それを受けてクローソンは *bidigüči* と読んで *bitigüči* “scribe, secretary” と同じとする (ED, p. 304). しかし「書記, 秘書」の場合は *bitigüči*, *bit(i)käči* / *bit(i)gäči*, *bitigči* のいずれかであり, 語根に *bid-* / *bidi-* を含む例はまったく在証されていない. それゆえ我々はまったく見方を変えて, *äv edgüči* 「テント作り, 帳幕設営人」という役職名の可汗側近とみなすべきと考える. 遊牧政権において「帳幕設営人」がいかに重要であるかについては, モンゴル政権の場合の *yurtči* 「宿営官」の例が参考になろう (cf. 本田 1991, pp. 72-74).

**S5, *altinč ay bir otuzqa*:** ここは新読部分である.

**S6, //////////////:** ここに (Y G)R W:Y G R D Q N と刻まれていることは明瞭で

あるが、未だに解釈不能である。

**S7, yaqinta # utdi:** ラムシュテット版に (b t nt) // D i とあり (Ramstedt 1913, p. 28), 旧版ではそれに引きずられて b t(nt)# // としたところを, 新たに読み直すことができた。まず冒頭部は b t ではなく Y Q であり, それと nt の残画から, yaqinta と再建した。つぎに, 碑文の断裂面を挟んで D の残画と i とを判読することができた。これは動詞に接続する三人称過去形の語尾 -di を形成し, 欠落部分には「カルルク族を」目的語とする後舌系の動詞語幹が刻されていたことが予想される。ところで直前に yaqinta を再建するためには a という 1 文字分のスペースが必須だから, この動詞のためには 1 文字分のスペースしか残らず, 推定される動詞は極めて限られる。しかるに, この 1 文字を W と推定して動詞 ut- を復原するならば, utdi > uddi と [d] の音を重複させ (テキン文法書 GOT, p. 99 が示す子音の同化現象), 合計 3 文字で動詞語幹と語尾とを再建することができる。以上のような考察を経て我々は, 本箇所を「カルルク族を近くで彼は [敗] った」と解釈するのである。

**S7, yarišda:** ここと W6 のヤリシュ (yariš) は, トニユクク碑文の第 31, 36 行目に現れるヤリシュ平原 (yariš yazi) を指すのだろうか (cf. 小野川 1943, pp. 323-324; GOT, pp. 251-252, 287-288)。そのヤリシュ平原ならアルタイ方面でボルチュ河にも近かったはずである。

**S8, ašnuqī tavyačdaqī oγuz türük tašiqmīš:** カマロフは「かつて唐にいたオグズ族と突厥族」を漢籍史料に現れる阿布思という人物が率いた集団とみなしている (Kamalov 2003, p. 87)。この阿布思は, 『旧唐書』巻 9, 玄宗本紀によれば, 第二可汗国滅亡期の 742 年, 突厥可汗の一族を率いて唐に投降してきた人物であり (天宝元年八月丁亥の条, p. 215), 後に朔方節度副使に任命された。しかし, 安祿山と対立したことで, 752 年に漠北に逃れた人物である (同, 天宝十一載三月の条, p. 225)。なるほど, 『通典』巻 199, 同羅伝などによれば, 彼は同羅部の族長であったと言うので (p. 5467), シネウス碑文の本箇所で「オグズ族と突厥族」を率いて現れるに相応しい人物である。また, 『資治通鑑』巻 216,

天寶十二載(753)五月己酉以降の条には「阿布思は回紇の破る所と爲る」とある(p. 6918). 本箇所は753年の11月に紀年されるべき記事が刻まれている部分であるから、カマロフの指摘は正しいものと考えられる。

**S10, baliqliy:** オルホン河(Orqun)と合流するバリクリク河(Baliqliy)を、ラムシュテットは、モンゴル語ハルハ方言で「魚の豊富な」という意味を持つ *džarmānt'ε* の訛った現在のジルマントウ *Džirmantu = Джирмант* (ジルマンタイ *Джирмантай*・ジャルマンタイ)河であると提唱し、田坂興道はさらにそれを清代の漢籍に見える朱爾馬台河ないし濟爾瑪台河に比定し、羽田亨も同じ結論を繰り返している(Ramstedt 1913, p. 60; 田坂 1941, p. 201; 羽田 1957, p. 200). 古ウイグル語の *baliq* は「魚」という意味(偶然にも「城郭」の *baliq* と同音異義語であるので注意)、*-liy* はモンゴル語の *-tu / -tai* と同じ所有を表わす接尾辞であるから、ラムシュテットの言う通りであればなんら問題はないが、一般にはモンゴル語で「魚」をいう語は *jīyasu ~ zaγas* である。しかし、レッシングの辞書には *jīram-a* “little fish” と *jīrmaγai* “fish roe, caviar” が載録されている(Lessing 1960, pp. 1058, 1060). 確かに、現代のジルマントウ(ジルマンタイ・ジャルマンタイ)河は、カラ=バルガスンの西南のホント郡<sup>ソム</sup>の方から北流してオルホン河に合流している。東ウイグル可汗国時代の首都オールドゥ=バリク(宮帳の城)の遺蹟であるカラ=バルガスンは、それら両河に囲まれた場所にあるのだから、葛勒可汗こと磨延巖がオルホンとバリクリクとの合流点に造営させたという「国の玉座」の地がここであることに疑問の余地はなからう。

さらに本稿は、E9に龍歳の紀年を見出したのであるから、編年体の文脈からみて、そのオールドゥ=バリクの造営が753年にかかることも確実である(田坂 1941, p. 199は753年とし、羽田 1958, p. 200は751~754年のいずれかとする)。しかるに田坂(p. 201)が、*örgin*「玉座」と *baliq*「城郭・都城」とはあくまで別物との立場から、この年にはまだこの地に都城はなく、従って葛勒可汗(磨延巖)の父の初代可汗(骨力裴羅)の時には都城はおろか宮殿さえなく、

あったのは牙帳すなわちテントにすぎないと断言し、羽田 (1957, pp. 200-201) もほぼそれと同様の見方をするのは承認できない。我々はむしろカラ=バルガス出土の墓葬壁記「大唐安西阿史夫人壁記」の考察により、この地にはウイグル可汗国成立以前に既に唐朝によって都護城 (Toyo-baliq) という城郭が建設されていたとの結論に至っている (石見/森安 1998, pp. 109-110)。

なお、松井太の指摘によれば、『元史』巻2, 太宗本紀・六年甲午 (1234) 秋の条に、太宗オゴデイの行営地としてダラン=ダバス (答闐答八思 < mong. Dalan-Dabaa(s) ) と並記される「八里里」は、古代トルコ語 Baliqlıy の漢字音写と考えられるという。旧報告書「モンゴル時代遺蹟・碑文現況」において、松田孝一が指摘するように (森安/オチル 1999, pp. 228-231), オゴデイ~モンケ時代のモンゴル皇帝はオルホン河・オンギ河の流域に沿って季節移動しており、この八里里 < Baliqlıy もこの領域に含まれていた蓋然性は高い。おそらく本シネウス碑文の Baliqlıy と同地であろう、と推定することができる (森安/オチル 1999, p. 194, n. 1)。

**S12, tuyruyuy:** ラムシュテット以来, tuyruyuy と再建され, toyurıy という名前の河川が想定されてきた (Ramstedt 1913, pp. 30-31)。しかし、本稿は、この部分を tuyruyuy と再建し、ウイグルの磨延啜が tuyruy という場所を配下の軍勢に越えさせた、と解釈したい。現在、ゴビアルタイ<sup>アイマク</sup> 県の中西部にはトゥグルク Terper という名の郡<sup>ソム</sup>がある (北緯 45 度 49 分 32 秒, 東経 94 度 49 分 08 秒)。そこは、S3 の注で言及したタイガン湖から約 200 km 西南西に位置し、アルタイ山脈を南北に越えるルート上にある。つまり、このトゥグルク郡から南西に 30 km ほど進み、アルタイ山脈の峠を越えれば、ハミや北庭 (ビシュバリク) 方面に通じるのである。次行 W1 には、カルルクの第二次西遷を唆する記述があり、北庭方面に逃れていたカルルク族に向けて、ウイグルの磨延啜が遠征軍を進發させていたという文脈を読みとれる。このような状況に鑑みれば、本箇所<sup>ソム</sup>に記録された tuyruy を現在のトゥグルクに比定することができるであろう。なお、モンゴル時代に長春真人が中央アジアでチンギス=カンに会見

した帰路、アルタイ山脈を南から北に越える際、彼がこのトゥグルクを通過したであろうことは、現地踏査によって確認されている。アルタイ越えの交通ルートを復元する上で参考になるだろう。村岡倫による調査記録とルートの復元図を参照のこと（村岡 2007, pp. 19-21, 28-29 [図 1, 2]）。

**W:** 西面の行の長さは他の三面に比べて長く（**Figure E** を参照）、かつ文字は小さいので、翻字の分量が他の約 1.5 倍になる。

**W1, bodun:** これは新読部分である。

**W1, qarluq:** 川崎は、このカルルク族に関する記事が、746 年の西遷に続く、二度目の西遷（754 年 8～10 月）についての記述だと初めて明確に指摘し、さらに、二度目に西遷した勢力が、最初の西遷によってアルタイ地方を根拠地にするようになっていたと考証している（川崎 1993, pp. 107-108）。

**W1, bari<p>:** ラムシュテット版（Ramstedt 1913, pp. 32-33）の B R i (= bari) を ED, p. 543b では B R P と読んで barip と復元している。発想としては正しく、本稿も同様に読むが、実際に刻まれているのは p ではなく、i である。碑刻者が誤刻したものと考えたい。

**W2, eki yañıq:** 日付の eki「2」は、ラムシュテット版（Ramstedt 1913, p. 33）では疑問符付き、旧版では読めないとして削除した部分であるが、今回、再確認できた。

**W2, kälti yiriya:** ここは今回初めて読めた部分である。

**W2, yaqayaru:** 「国境まで」。これは旧版での新読箇所である。ここにいう国境とは、E8 と S2 とに「私はそこに国境を設定した」とあるものと同じはずである。もちろんこの時代に現代的な意味での国境という概念があるわけではないが、当時もそれなりの領土意識があったことがうかがえる。

**W2, basmil:** S4 では B š m i L, S7, S12 では B š m L であるが、ここでは B š m l とあって -l の部分には前舌文字 l が使われている。タリアト碑文 N4 のみならず、同時代に作成されたと考えられているバヤンホンゴル<sup>アイマク</sup> 県 発現のブン

ブル碑文にも B S m l という同様の例がある (Баггулга 2005, p. 119).

**W3, olurtim:** ここは新読部分である。

**W3, quriya:** ここも新読部分である。森安 2002, p. 138 では W3 の記事を安史の乱 (755 ~ 763 年) による玄宗皇帝の蒙塵 (756 年) と絡めて、この欠落部分を quriyaru 「西方へ」と推測したが、この度の拓本再精査により、むしろ quriya と読むべきと判断した。

**W3, oylin:** -n の部分には前舌文字 n が使われている。後舌語に、明記された三人称語尾 -i と前舌の +n が付いているのであるから、この +n が対格であることは、テキン文法書にいう母音調和の例外法則 (GOT, pp. 59-62; cf. Кононов 1980, p. 159) 通りである。同じような現象が以下の W4, qizın; W6, tuyin でも見られ、さらに一人称命令形については W5, yazmayin, yanılmayin bolayin で見られる。ただしテキン自身がいうように、この例外法則は突厥時代の特徴であって、ウイグルではむしろ母音調和の原則に従う方が多い。もちろん本碑文でもそうっており、その実例はテキンが列挙している 8 例 (GOT, p. 61) 以外に、N5, bodunumın (B W D N m N) がある。にもかかわらずその例外法則が本碑文の終わりの方になってやや集中して現れるのは、何か特別の理由があるのであろうか。

**W3, -ki bodun:** eki bodun 「2つの人々」と -däki bodun 「～にいる人々」のいずれか決めかねる。bodun の後には G か m のどちらかの残画が見える。

**W3, -g toqidim:** シネウス碑文中に見える toqi- の用例は、「(敵を) 打ち負かす」か「(塙柵を) 打ち立てる」のいずれかである。ここでは文脈からして前者ではあり得ないので、後者の可能性を考えておきたい。この推測は、直後に続く文が「そこに留まって (本拠を定めて) その帳幕のために幸運の装飾用籬を飾り付けた」となっているのとうまく合致する。すなわち、ここには、磨延啜が率いて南下してきたウイグル軍団の本拠となるキャンプ地を設営したことが述べられていたはずである。

**W3, äviñä ettim:** Berta 1995, p. 12, n. 14 ではこの前舌語 äviñä を後舌語 biñä と

同じであるとみなし、かつ前舌語 *ettim* までも後舌語 *idtim* と読み換えることを提案する。しかしここは次の行にも 2 回 *äv*「テント、帳幕；家」が現れる文脈であるから、敢えてそのような解釈をする必要はない。

**W3, *qut yaratıy tuyın*:** カマロフは、W3-5 の記事を、磨延啜が自らウイグル軍を率いて南下した中国遠征に関わるものであり、756 年 12 月に安史勢力側の阿史那從礼が率いる軍勢を、唐軍と共同して破り、757 年 2 月にモンゴリアに帰還するまでを叙述したものとみなした (Kamalov 2001, pp. 251-252)。この事件に関連する漢籍の最重要記事を次に引用する。

『新唐書』卷 217 上、回鶻上 (p. 6115)

肅宗即位，使者來請助討祿山。帝詔燉煌郡王 承寔與約，而令僕固懷恩送王，因召其兵。可汗喜，以可敦妹爲女，妻承寔，遣渠領來請和親。帝欲固其心，即封虜女爲毗伽公主。於是可汗自將，與朔方節度使郭子儀合討同羅諸蕃，破之河上。與子儀會呼延谷，可汗恃其疆，陳兵引子儀拜狼纛而後見。

和訳：佐口／山田／護 1972, pp. 376-377 の和訳を部分的に改変した。

[至徳元 (756) 年七月] 肅宗が (靈武で) 即位すると、(回鶻の) 使者が来て、唐を援助して安祿山を討ちたいと請うた。帝は敦煌郡王・承寔に詔して、盟約を結ばせようとはかり、僕固懷恩に王を (回鶻まで) 護送させ、そうして回鶻の軍隊を招かせた。可汗は喜んで、可敦の妹を王女にして、承寔に妻<sup>めあ</sup>わせ、ついで首領を派遣してきて、和親を請うた。帝はその (回鶻の) 心を固めようと欲し、虜 (回鶻) の王女を封じて毗伽公主となした。ここにおいて、可汗はみずから大将となって (漠南に出軍してきて)、朔方節度使・郭子儀と合流し、(安史側の) 同羅などの諸蕃を討ち、これを黄河のほとりに破った。(そして) 郭子儀と (陰山の) 呼延谷において会見することになった時、可汗は自分が強力であることを誇示して、兵隊を整列させ、郭子儀を面前へ呼びつけ、狼の飾りを頭につけた纛 (旗の意) を拝礼させてから会見した。

森安 2002, p. 131, n. 21 でも詳述したように、このウイグル可汗の権力・権威の象徴とも言うべき「狼纛」に、唐側の総大将であった郭子儀が拝謁させられたという記事の信憑性については、これを認めない羽田説(羽田 1957, p. 195)ではなく、真実とみなすカマロフ説に従いたい。また、W4 の「2 月 6 日」を、その直後に見える「鶏歳 (757 年)」とみなす点でも我々はカマロフと同意見である。しかしながら、磨延賧が、阿史那從礼の率いる同羅を始めとする安史勢力軍を打破した後に下馬した本営を、モンゴリアの本拠地とみなす点には同意できない。我々は、むしろこの本営は遠征先の漠南(現在の内モンゴル)のどこか(恐らくは包頭のすぐ北にある呼延谷)に置かれた仮本営であるとみなすのである。とはいえ、いずれにせよ、W3 行末に見える *tuy* 「纛」とは、上の記事に見える「狼纛」のことに違いないと確信し、旧版で直前の *äviğä ettim* と合わせて「私は彼の帳幕のために作った、幸運?????? 纛を」としていた解釈を改めて、「私はその帳幕(私の本営)のために幸運の装飾用纛を飾り付けた」とする。et-, *yarat-* の第一義は「作る、造作する」であるが、いずれにも「飾る」という派生的意味がある。

**W4, *bardim*:** ここは新読部分である。

**W4, *olurtim*:** こども新読部分である。

**W4, *onč uyüş añıy yoq qılmış*:** ラムシュテット版 (Ramstedt 1913, p. 34) でも旧版でも十分には解釈できなかった箇所、*uyüş añıy* は新読部分である。この箇所は 757 年以降の記事で、ちょうどウイグル軍が安史の乱に介入していた頃に対応する。*onč* の解釈ができないが、唐王朝側あるいは安史勢力側いずれかのある *uyüş* 「一族」が問題になっているのであろう。安史の乱における唐とウイグルの動向については、森安 2002, pp. 130-134 を参照。Kamalov 2001 でも同じテーマを扱うが、史料の読解にやや誤りがあるので注意されたい。

**W4-5, *eki qızın tapıy ber[ti(?)]*:** *qızın* の *-n* の部分には前舌文字 *n* が使われている。ただし翻字は *iQizn* であって *iQizın* ではない。先行語が数詞の「2」であるからだろうか。W3, *oylin* の項参照。さて、カマロフは、ウイグルの磨

延暉に「奉仕に出」されるこの二人の生娘を、漢籍に見える肅宗の娘・寧国公主と、その添い嫁であった榮王の娘・小寧国公主に比定した (Kamalov 2003, pp. 88-89). 寧国公主は肅宗の第二女であり (『旧唐書』巻 10, 肅宗本紀, p. 253; 『新唐書』巻 83, 諸帝公主, p. 3660), 小寧国公主は、玄宗の第六子である榮王の娘であることが (『旧唐書』巻 107, 玄宗諸子, p. 3261; 巻 195, 迴紇, p. 5210), それぞれ確認できる. その迴紇伝の同じ箇所の記事によれば、磨延暉の死後、子供のいなかった寧国公主が唐に帰朝した後は、磨延暉の子を産んでいた小寧国公主に可敦号が授けられ、続く第 3 代牟羽可汗の可敦にもなった (佐口 / 山田 / 護 1972, p. 346). 2 人の公主は、乾元元 (758) 年七月に唐からウイグルに向けて出発しており、同年九月にウイグルから唐に向けて、公主降嫁に対する返礼使節が送られている (『旧唐書』巻 195, 迴紇, pp. 5200-5201) ことから考えれば、寧国公主一行がウイグルに到着したのは、明らかに 758 年中である. そこで、本稿訳文中においては、「2 人の生娘」が現れる直前の欠落中に「犬歳 (758 年)」を復元・提示している.

**W5, bartači:** ここは新読部分である.

**W5, ävim:** ここは新読部分である. 直後の単語は ol か olur- の可能性がある.

**W5, qutıña:** ラムシュテットは (s ü z)η a と推定したが (Ramstedt 1913, p. 34), η の直前は明確に T を読みとることができ、さらに uQW の残画を確認できた.

**W5, yazmayın, yağılmayın:** -mayın の n の部分には 2 回とも前舌文字 n が使われており、トルコ語の母音調和の大原則からははずれている. しかしこれも上の W3, oylın の項で見たのと同じく、テキン文法書にいう突厥時代の母音調和の例外法則には合致している.

**W5, yičä bolayın:** ラムシュテットが ičikmädi 「服属しなかった」と読んだ部分を (Ramstedt 1913, p. 35), 旧版で yičä bol[t]i と読み変えたが、今回さらに、このように読むことができた. やはり一人称命令形を形成する接尾辞の -ayın の n の部分には前舌文字 n が使われていた. 先行する 2 文のように、本箇所の一人称命令形の文言の後には **tedi** 「と彼は言った」が彫られていた

可能性は高いとみられる。

**W5, suɣdaq tavyačqa säläğädä bay baliq yapiti bertim:** この一文に対し、これまで我が国では一般に、757年、葛勒可汗こと磨延啜が領土内の「ソグド人・中国人に命じて」一都市を建設させたのであると解釈されてきた (cf. 護 1981, p. 121). suɣdaq tavyač に付いている与格語尾 -qa は、使役文の中では使役される者を表すから、文法的にこの解釈で問題はない。それにもかかわらずクローソンは ED, p. 872b において “so I had Bay Balik built on the Selenga for travelling Sogdians and Chinese” と訳している。“travelling” という訳語は、原文の šW(GD)Q = suɣdaq の前の ..č g(n) を köčgün/köčgän “migratory, transitory” ととるからである (ED, p. 697a)。もしこの復元が正しければ、「定住しないで移動しているソグド人・中国人」とはソグド人や漢人の商人と考えて間違いなからう。恐らくクローソンは、ソグド人や漢人の商人が土木建設に従事するのはいささか無理と考えて、上のような解釈をしたのであろうが、その復元はまだ確実とは言えない。そこで、旧版では、単に「ソグド人と中国人に」と翻訳した上で、その解釈に関しては「ソグド人と中国人の職人たちに命じて」あるいは「ソグド人と中国人を住まわせるために」という2つの案を提示しておいた。さらに森安 2007, p. 279 でも、「ソグド人と漢人を駆使して」と解釈した。

しかしながら、その後、我々は議論を重ねて、本碑文のこのあたりの記事は、ウイグルが安史の乱制圧のために唐に遠征軍を出動させた「成果(人的資源の獲得)」を誇示している部分であるという認識に到達した。つまり我々は、ウイグルの唐遠征を契機に、唐側から大量のソグド人・漢人が自らの意志により、あるいは捕虜として、新たにモンゴリアに流入しただけでなく、寧国公主・小寧国公主のウイグルへの降嫁に際してもかなりの随行員が到来したのであり、それらの人員を収容するために、バイバリク(富貴城)を建設したのであろうと考えるに至ったのである。それゆえ、最終的に「ソグド人と漢人のために」という訳文を採用する。

**W6, tūyin:** -n の部分には前舌文字 n が使われている。W3, oγlin の項参照。

**W7, ekinti ay:** 先行する W4-5 に見える 2 人の公主降嫁は、漢籍史料より乾元 (758) 年七月以降のことと判明しているから、この ekinti ay「2 月」は 759 年でなければならない。そして磨延啜自身は乾元二 (759) 年四月に逝去するから、W8-9 & Extra a-d には彼の最期と葬儀に関わる記述があって、本碑文を締めくくっていたはずである。

**W9, tūmān:** t ü m N とあって -n の部分には後舌文字 N が使われている。

## 史料典拠一覧

『魏書』→ 北京：中華書局標点本, 1974.

『旧唐書』→ 北京：中華書局標点本, 1975.

『新唐書』→ 北京：中華書局標点本, 1975.

『通典』→ 北京：中華書局標点本, 1988.

『太平寰宇記』→ 北京：中華書局標点本, 2007.

『資治通鑑』→ 北京：中華書局標点本, 1956.

『冊府元龜』→ 『宋本冊府元龜』北京：中華書局影印本, 1989.

## 略号

*Album* = O. F. Sertkaya, C. Alyılmaz, Ts. Battulga (eds.), *Album for the Project on Turkish Monuments in Mongolia. (Moğolstandaki Türk Anıtları Projesi Albümü)*, Ankara, 2001.

*AoF* = *Altorientalische Forschungen*, (East) Berlin.

*AOH* = *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, Budapest.

*APAW* = *Abhandlungen der Preussischen Akademie der Wissenschaften*, Phil.-hist. Klasse, Berlin.

*CAJ* = *Central Asiatic Journal*.

*ED* = G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford, 1972.

*ETY* = H. N. Orkun, *Eski Türk Yazıtları*. I 1936; II 1938; III 1940; IV 1941. İstanbul. (Rpt. 4 vols. in 1, Ankara, 1987)

- GOT = T. Tekin, *A Grammar of Orkhon Turkic*. Bloomington / The Hague, 1968.
- GOT H = M. Erdal, *A Grammar of Old Turkic*. (Handbook of Oriental Studies VIII-3), Leiden / Boston, 2004.
- JA = *Journal Asiatique*.
- JSFOu = *Journal de la Société Finno-Ougrienne*.
- MSSP = H. Halén (ed.), *Memoria Saecularis Sakari Pälsi. Aufzeichnungen von einer Forschungsreise nach der nördlichen Mongolei im Jahre 1909*. Helsinki, 1982.
- OTWF = M. Erdal, *Old Turkic Word Formation*. 2 vols., Wiesbaden, 1991.
- PDPMK = С. Е. Малов, *Памятники древнетюркской письменности Монголии и Киргизии*. Ленинград, 1959.
- SCMT = L. Bazin, *Les systèmes chronologiques dans le monde turc ancien*. Budapest, 1991.
- TMEN = G. Doerfer, *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*. 4 vols., Wiesbaden, 1963-75.
- TTT = *Türkische Turfan-Texte*.
- VWTD = W. W. Radloff, *Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte*. 4 vols., St. Petersburg, 1893-1911. (Rpt. 's-Gravenhage, 1960).
- 片山報告書 = 片山章雄 (研究代表者) 『廻紇タリят・シネ = ウス兩碑文 (8世紀中葉) のテキスト復原と年代記載から見た北・東・中央アジア』1993年度東海大学文学部研究助成金研究成果報告書。
- 旧版 = 森安孝夫「シネウス遺蹟・碑文」(森安／オチル 1999, pp. 177-195)。
- 蒙古国 = 中国内蒙古自治区文物考古研究所・蒙古国遊牧文化研究國際學院・蒙古国國家博物館 (編) 『蒙古国古代遊牧民族文化遺存考古調查報告 (2005 ~ 2006 年)』北京：文物出版社, 2008。

## 文献目録

Aalto, P.

- 1946 Zu den Pferdnamen der Orchon-Inschriften. *Finnish-Ugrische Forschungen* 29, pp. 127-133.
- 1966 G. J. Ramstedt's archäologische Aufzeichnungen und Itinerarkarten aus der Mongolei vom Jahre 1912. *JSFOu* 67-2, pp. 1-19, incl. many maps.
- 1971 *Oriental Studies in Finland 1828-1918*. Helsinki.

Айдаров, Г.

- 1971 *Язык орхонских памятников древнетюркской письменности VIII века*. Алма-Ата.

Баттулга, Ц.

- 2005 Бөмбөгөрийн бичээс. *Acta Mongolica* 2004-4, pp. 117-124.

Bazin, L.

- 1982 Notes de toponymie turque ancienne. *AOH* 36-1/3, pp. 57-60.

Bazin, L. & J. Hamilton

- 1979 Remarques sur l'expression *kiz koduz* en turc ancien. *Turcica* 11, pp. 187-189.

Berta, Á.

- 1994 Die Verteilung der militärischen Termini in den Runeninschriften. *AOH* 47-1/2, pp. 49-56.
- 1995 *Yälmä* und *Bīña*. In: B. Kellner-Heinkele & M. Stachowski (eds.), *Laut- und Wortgeschichte der Türkssprachen. Beiträge des Internationalen Symposiums, Berlin, 7. bis 10. Juli 1992*, Wiesbaden, pp. 9-16.
- 2004 A Šine-usu felirat (759). In: *Szavaimat jól halljátok... : A türk és ujjur rovásírásos emlékek kritikai kiadása*, Szeged, pp. 265-314.

Болд, Л.

- 1990 *БНМАУ-ын нутаг дахь хадны бичээс*. Улаанбаатар.

Clark, L.

- 2000 The Conversion of Bügü Khan to Manichaeism. In: R. E. Emmerick, W. Sundermann and P. Zieme (eds.), *Studia Manichaica. IV. Internationaler Kongreß zum Manichäismus, Berlin, 14.-18. Juli 1997*, (Berichte und Abhandlungen der Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Sonderband 4), Berlin: Akademie Verlag, pp. 83-123, incl. 3 pls.

Czeplédy, K.

- 1962 Čoγay-quzi, Qara-qum, Kök-öng. *AOH* 15-1/3, pp. 55-69.
- 1973 Gardizi on the History of Central Asia (746-780 A.D.). *AOH* 27, pp. 257-267.

Giraud, R.

- 1961 *L'inscription de Bain Tsokto*. Paris.

Golden, P. B.

- 1980 *Khazar Studies: An Historico-philological Inquiry into the Origins of the Khazars*, Budapest.

Halén, H. (ed.)

- 1978 *Handbook of Oriental Collections in Finland*. (Scandinavian Institute of Asian Studies Monograph Series 31), London / Malmö.

Hamilton, J.

- 1962 Toquz-Oγuz et On-Uyyur. *JA* 250, pp. 23-63.

al-Iṣṭakhrī

- 1967 *Kitāb Masālik al-Mamālik / Viae Regnorum*. (M. J. de Goeje (ed.), *Bibliotheca Geographorum Arabicorum* vol. 1), Leiden.

Kamalov, A.

- 2001 Turks and Uighurs during the Rebellion of An Lu-shan Shih Ch'ao-yi (755-762). *CAJ* 45-2, pp. 243-253.
- 2003 The Moghon Shine Usu Inscription as the Earliest Uighur Historical Annals. *CAJ* 47-1, pp. 77-90.

Каржаубай, С.

- 2002 *Объединенный каганат тюрков в 745 - 760 годах*. Астана.

Kljaštornyj, S. G.

1988 Die Kiptschaken auf den runischen Denkmälern. *CAJ* 32-1/2, pp. 73-90.

Klyashtorny, S. G.

1982 The Terkhin Inscription. *AOH* 36-1/3, pp. 335-366, -17 pls.

1985 The Tes Inscription of the Uighur Bögü Qaghan. *AOH* 39-1, pp. 137-156, +5 pls.

Кляшторный, С. Г.

1964 *Древнетюркские рунические памятники как источники по истории Средней Азии*. Москва.

Кононов, А. Н.

1980 *Грамматика языка тюркских рунических памятников <VII-IX вв.>*. Ленинград.

Lessing, F. D.

1960 *Mongolian-English Dictionary*. University of California Press.

Малов, С. Е.

1952 *Енисейская письменность тюрков. Тексты и переводы*. Москва / Ленинград.

Müller, F. W. K.

1915 Zwei Pfahlschriften aus den Turfanfunden. *APAW* 1915, Nr. 3, 38 pp. + 1 pl.

Ögel, B.

1951 Şine Usu yazıtının tarihi önemi (Kutluk Bilge Külkagan ve Moyunçur). *Türk Tarih Kurumu Belleten* 15-59, pp. 361-379.

Pellat, Ch.

1962 *Mas'ūdī (mort en 345/956): Les prairies d'or*. tome 1, Paris, 1962.

Pelliot, P.

1929 Neuf notes sur des questions d'Asie Centrale. *T'oung Pao* 26, pp. 201-266.

Ramstedt, G. J.

1913 Zwei uigurische Runeninschriften in der Nord-Mongolei. *JSFOu* 30-3, 63 p., +3 pls.

Рамстедт, Г. И.

1914 Как был найден «Селенгинский камень.» Перевод надписи Селенгинского камня. *Труды Троицкосавско-Кяхтинского Отделения Приамурского Отдела Императорского Русского Географического Общества* 15-1, pp. 34-39, 40-49.

Tekin, T.

1983 The Tariat (Terkhin) Inscription. *AOH* 37-1/3, pp. 43-68.

Tryjarski, E.

1981 Die alttürkischen Runen-Inschriften in den Arbeiten der letzten Jahre Befunde und kritische Übersicht. *AoF* 8, pp. 339-352.

Тугушева, Л. Ю.

1991 *Уйгурская версия биографии Сюань-Цзана*. Москва.

Убрятова, Е. И. & Базилхан, Б.

1963 Эртний тюрк бичээс судласан дүнгээс. *БНМАУ-ын Шинжлэх Ухааны Академийн Мэдээ* 1963-4, pp. 71-76.

Шинэхүү, М.

1975 *Тариатын орхон бичгийн шинэ дурсгал*. (SA, Том. 6, Fasc. 1), Улаанбаатар.

Войтов, В. Е.

1996 *Древнетюркский пантеон и модель мироздания в культово-поминальных памятниках Монголии VI-VIII вв.*, Москва.

Zieme, P.

1981 *Uigurische Steuerbefreiungsurkunden für buddhistische Klöster. AoF* 8, pp. 237-263, + 4 pls.

岩佐 精一郎

1936 和田清 (編)『岩佐精一郎遺稿』東京, 岩佐傳一發行.

石見 清裕/北條 祐英

1994 「ウイグル初期 (744-750 年) の碑文史料と漢文史料」(片山報告書, pp. 15-21).

石見 清裕/森安 孝夫

1998 「大唐安西阿史夫人壁記の再読と歴史学的考察」『内陸アジア言語の研究』13, pp. 93-110, +2 pls.

王 静如

1938 「突厥文回紇英武威遠毗伽可汗碑訳釈」『輔仁学誌』7-1/2, pp. 1-55 [pp. 240-186 の逆頁].

大澤 孝

1999 「テス碑文」(森安/オチル 1999, pp. 158-167).

小野川 秀美

1943 「突厥碑文訳註」『滿蒙史論叢』4, pp. 249-425 [別刷は pp. 1-177].

片山 章雄

1981 「Тогуз Огуз「九姓」の諸問題について」『史学雑誌』90-12, pp. 39-55.

1984 「突厥第二可汗国末期の一考察」『史朋』17, pp. 25-38.

1994 「シネ=ウス碑文における「748 年」」(片山報告書, pp. 10-14).

1999 「タリят碑文」(森安/オチル 1999, pp. 168-176).

川崎 浩孝

1993 「カルルク西遷年代考——シネウス・タリят碑文の再検討による——」『内陸アジア言語の研究』8, pp. 93-110.

耿 世民

2005 「磨延礪碑」『古代突厥文碑銘研究』北京: 中央民族大学出版社, pp. 193-205.

佐口 透/山田 信夫/護 雅夫 (訳注)

1972 『騎馬民族史 2——正史北狄伝』(東洋文庫 223) 東京: 平凡社.

岑 仲勉

1958 『突厥集史』上・下, 北京: 中華書局.

芮 伝明

1998 『古突厥碑銘研究』上海: 上海古籍出版社.

田坂 興道

1941 「漠北時代に於ける回紇の諸城郭に就いて」『蒙古学報』2, pp. 192-243.

谷 憲

1984 「天宝元年前後の北アジア情勢—— Bazin 説の検討を中心として——」『史游』  
(金沢大学文学部東洋史研究室) 15, pp. 5-19.

内藤 みどり

1988 『西突厥史の研究』東京：早稲田大学出版部。

羽田 亨

1957 「唐代回鶻史の研究」『羽田博士史学論文集』上巻：歴史篇，京都，pp. 157-324.

1958 『羽田博士史学論文集』下巻：言語・宗教篇，京都。

林 俊雄

1994 「ウイグル可汗国初期の石碑遺跡」(片山報告書，pp. 6-9)。

2005 『ユーラシアの石人』(ユーラシア考古学選書) 東京：雄山閣。

本田 実信

1991 「モンゴルの遊牧的官制」『モンゴル時代史研究』東京：東京大学出版会，pp.  
69-82.

村岡 倫

2007 「チンカイ城と長春真人アルタイ越えの道—— 2004 年現地調査報告をかねて  
——」『龍谷史壇』126, pp. 1-35.

村山 七郎

1968 「護雅夫著『古代トルコ民族史研究Ⅰ』」『東洋学報』50-4, pp. 139-140.

護 雅夫

1967 『古代トルコ民族史研究Ⅰ』東京：山川出版社。

1981 「遊牧国家の「文明化」」『北アジア史(新版)』(世界各国史 12) 東京：山川出版  
社，pp. 81-134 [再録：護雅夫『古代トルコ民族史研究Ⅲ』東京：山川出版社，  
1997, pp. 42-85].

森安 孝夫

1977 「チベット語史料中に現われる北方民族—— DRU-GU と HOR ——」『アジア・  
アフリカ言語文化研究』14, pp. 1-48.

2002 「ウイグルから見た安史の乱」『内陸アジア言語の研究』17, pp. 117-170, +2 pls.

2007 『シルクロードと唐帝国』(興亡の世界史 第5巻) 東京：講談社。

森安 孝夫/A. オチル

1999 「モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告」大阪(豊中)：大阪大学文学部・中央  
ユーラシア学研究会 [T. Moriyasu & A. Ochir (eds.), *Provisional Report of  
Researches on Historical Sites and Inscriptions in Mongolia from 1996 to 1998*,  
(Osaka University, Faculty of Letters, The Society of Central Eurasian Studies)].

山田 信夫

1989 「遊牧ウイグル国の滅亡」『北アジア遊牧民族史研究』東京：東京大学出版会，  
pp. 129-155.

Figure A シネウス遺跡 (MSSP, p 59 の図面に増補)

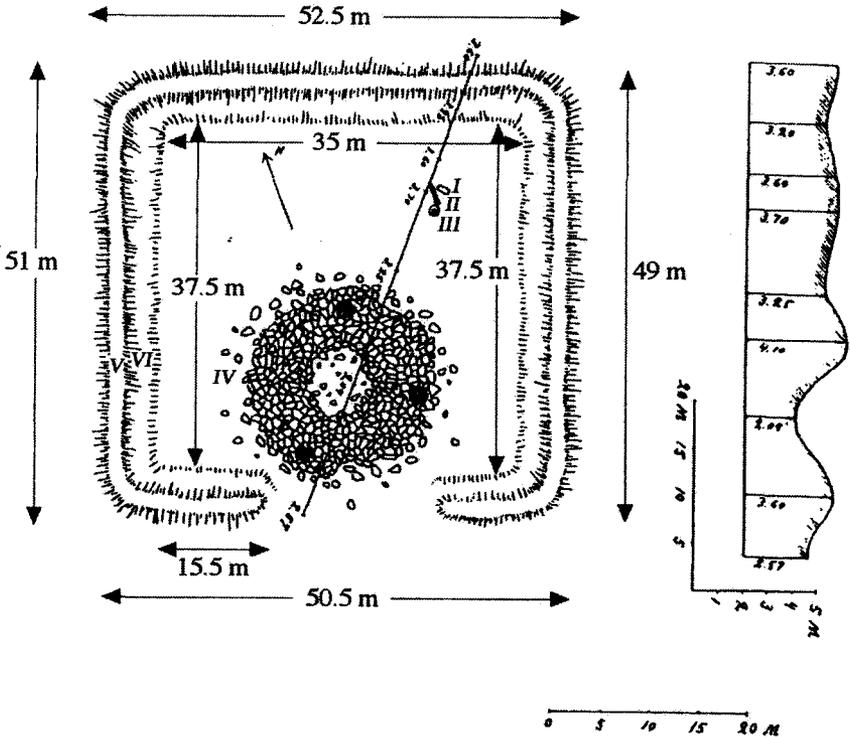


Fig. 3. Das Grab am See Šine-usu. (I) kürzeres Stück des Inschriftensteins, (II) längeres Stück des Inschriftensteins, (III) Sockelstein, (IV) geöffneter Grabhügel, (V) Erdwall, (VI) Wallgraben.

I, II, III の碑石と亀趺の現在地は少しずれている。

IV 積石塚の盗掘跡の穴の深さ：1.9 m 前後

この穴の中央で GPS 測定：N 48° 32' 28", E 102° 12' 46", 海拔 1555 m

V Erdwaal (土塁)

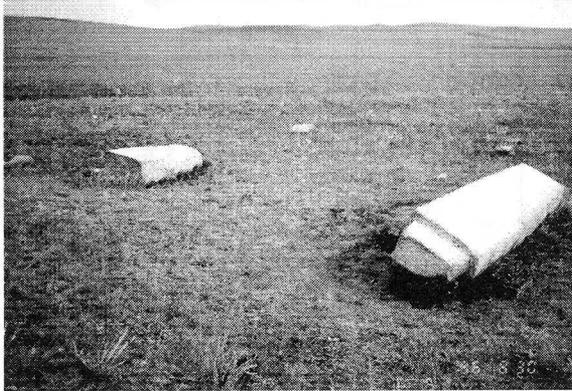
VI Wallgraben (周溝) の幅：2 ~ 2.5 m

**Figure B** シネウス碑文と亀趺 (計測：森安孝夫／作図：片山章雄)

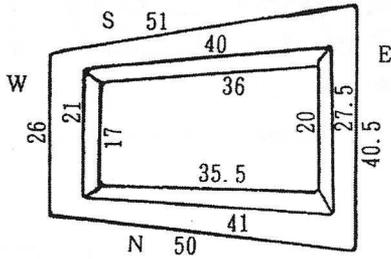
碑文の現況

左：小断片 (上部)

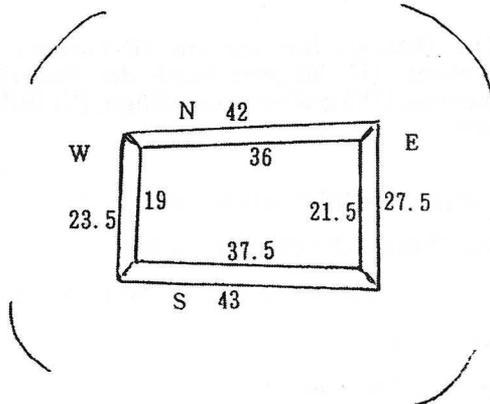
右：大断片 (下部)



碑文の下底部

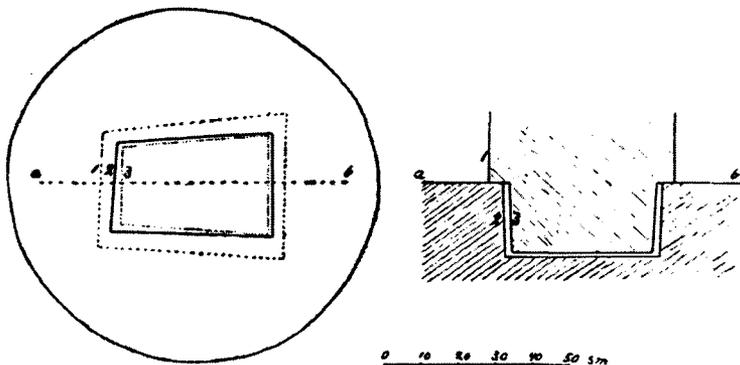


亀趺のほぞ穴

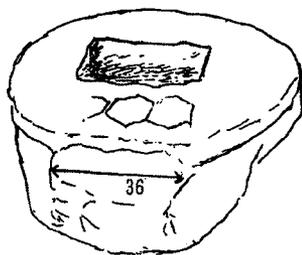
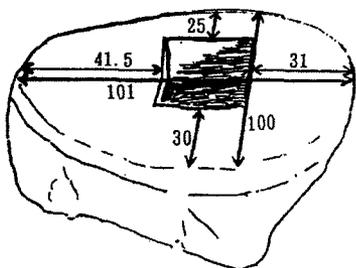


単位：cm

参考 MSSP, p. 60, Fig. 4. Sockelkonstruktion des Šine-usu-Denkmal.



亀趺の計測：図版はボラロイド写真（撮影：森安孝夫）からトレース



首の部分の高さ：41 cm

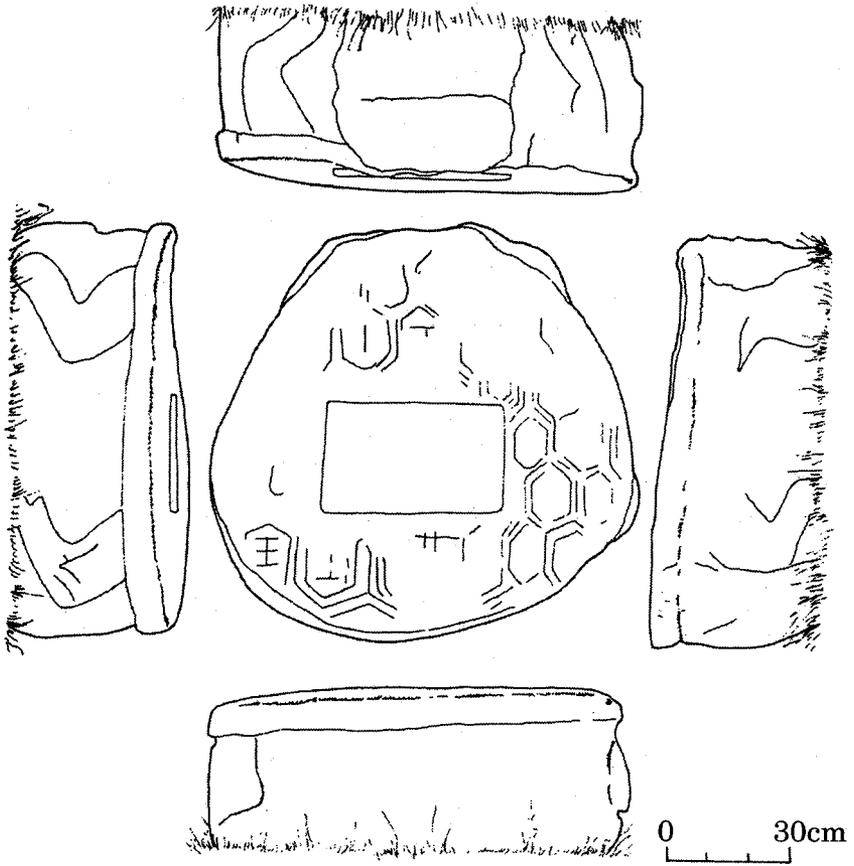
甲羅の厚さ：7～8 cm

甲羅下での周囲：316 cm

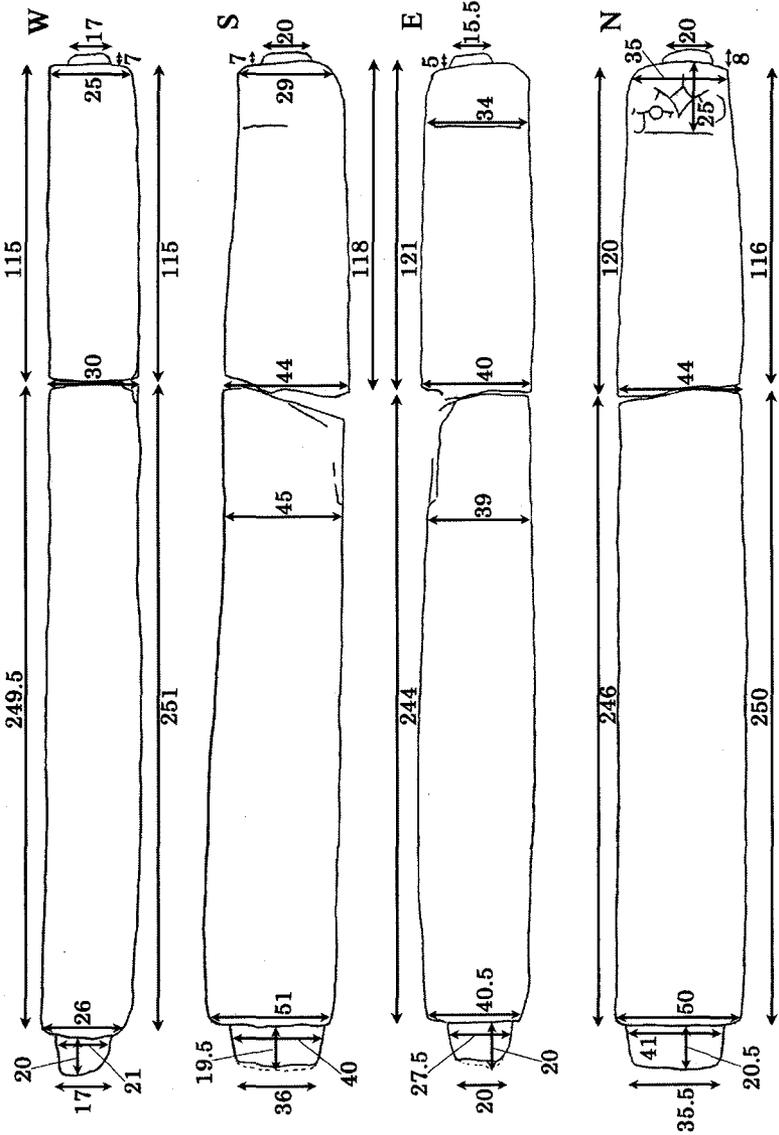
後部の高さ：43 cm



Figure C シネウス碑文の亀趺 (作図：バヤル)

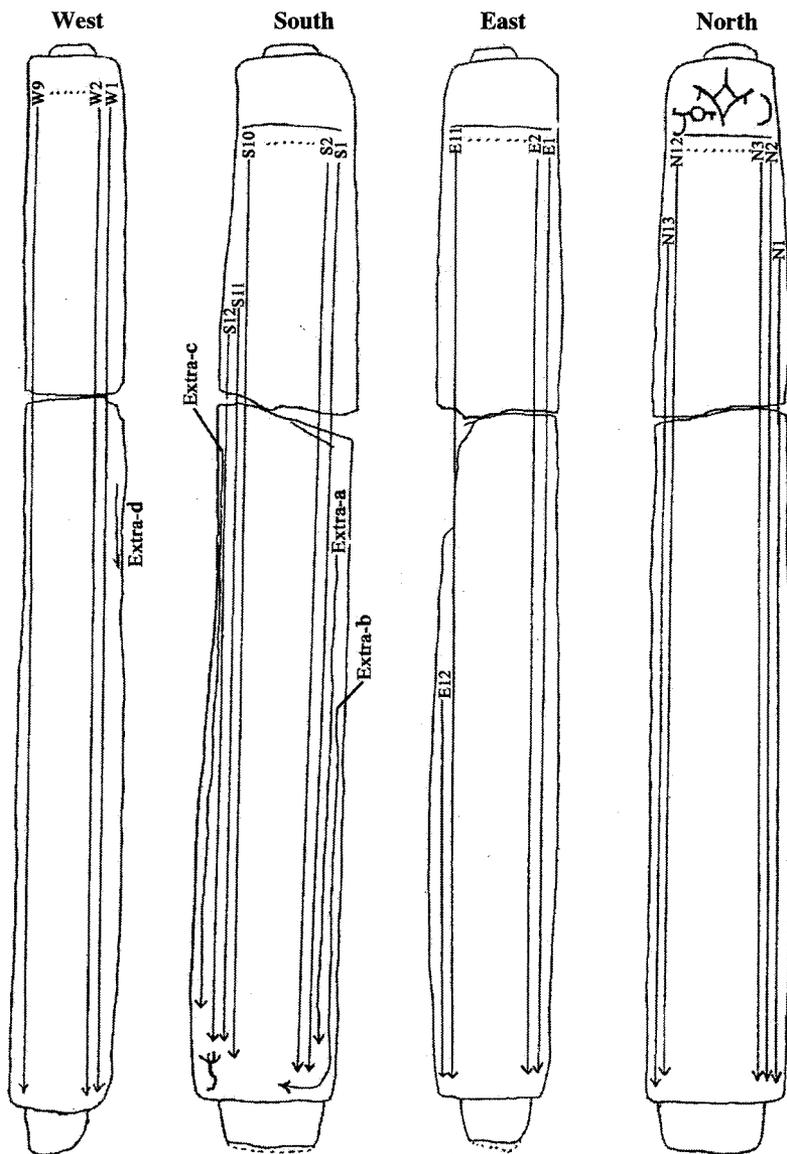


**Figure D** シネウス碑文の計測図 (計測：森安孝夫／作図：片山章雄)



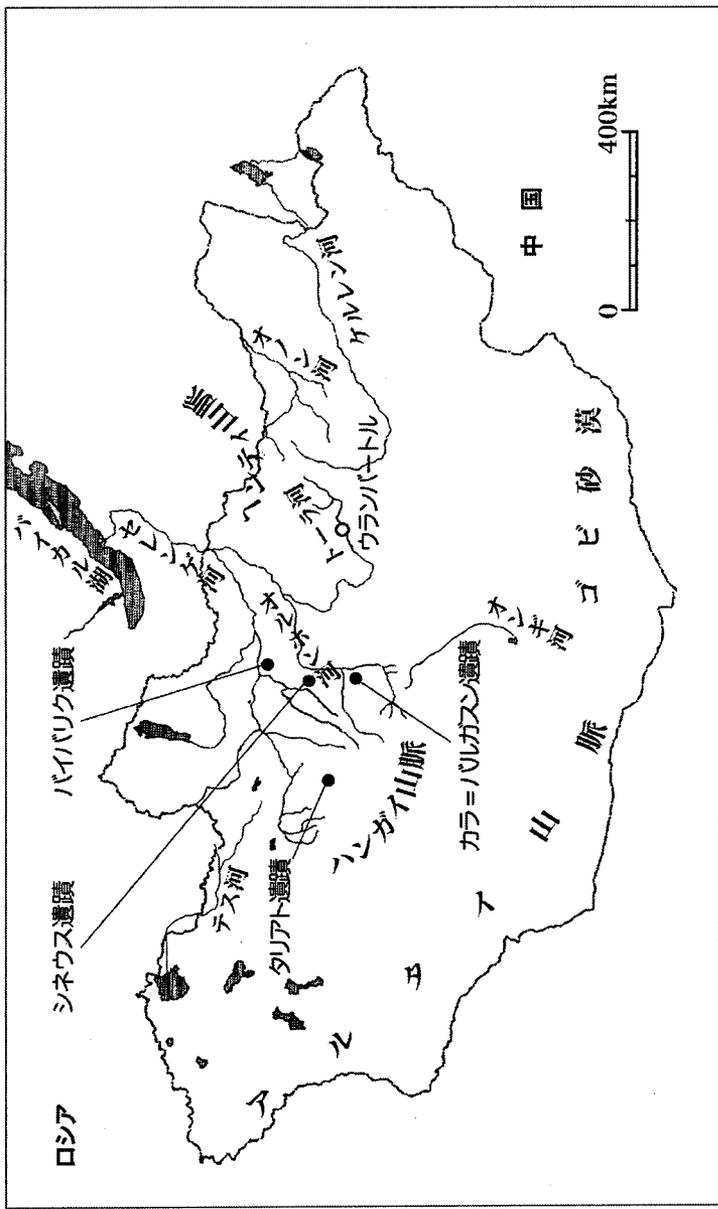
単位：cm(フィンランド隊の数値と異なる箇所があるがそのままとした。 Cf. MSSP, p. 60)

Figure E シネウス碑文の行の進み方



N1 → N12 → N13 → E1 → E12 → S1 → S12 → W1 → W9; Extra-a, Extra-b; Extra-c → Extra-d

Figure F



シネウス遺蹟・碑文関連地図

Summary:

**Šine-Usu Inscription from the Uighur Period in Mongolia :  
Revised Text, Translation and Commentaries**

Takao MORIYASU, Kosetsu SUZUKI, Shigeo SAITO,  
Takeshi TAMURA and BAI Yudong

Šine-Usu Inscription is found in Mogoyñ Šine-Usu region located some 360 km west-northwest of Ulaanbaatar, the capital of actual Mongol Uluṣ. It is an Turkic epitaph written in Runic script commemorating Moyanchuo 磨延啜, the second Qayan of the Uighur Qaghanate (r. 747-759 A.D.).

In this article we have revised the edition published by T. Moriyasu in his contribution “Site and Inscription of Šine-Usu” in T. Moriyasu & A. Ochir (eds.), *Provisional Report of Researches on Historical Sites and Inscriptions in Mongolia from 1996 to 1998*, Osaka : The Society of Central Eurasian Studies, 1999/3, pp. 177-195. Moriyasu’s edition was based mainly on the two rubbings of the inscription prepared by him and his team during 1996-1999 as one of the fruits of Japan–Mongol joint expedition named “Bichees Project”, while from place to place he also referred to the old photographs published in Ramstedt 1913.

Since then the present authors have attempted to clarify the parts left undeciphered by Moriyasu. By carefully examining the above-mentioned two rubbings now housed at Osaka University, we have succeeded in reading so many letters and words that we have decided to publish the revised version together with full commentary on difficult words and expressions as well as on the historical backgrounds of some passages. In this article we publish the photographs of one of the rubbings that was made in 1996 for the first time. We also revise figures of the Šine-Usu inscription published in the *Provisional Report*.